

正・政・清・聖・性・醒

炉ばたセイ談



令和2年秋号

巻頭言

ヤミが鳴き、空が青く晴れ渡るよ、あの日のことを昨日のよりに思い出す。それはまだほくが少年の病後が癒えて間のない頃、可愛がついてくれたいた近所の奥さんがこころあった。

「坊ちゃん、11月9日のよ、せむなごびネ。終戦日。」と確か田一杯泪をためていたようであった。ほくはびっくりした。アメリカが広島に原子爆弾というものを落としたということだ。よぶんからなかったが、一瞬のうちにマチがなくなつたという11月9日だ。

ほくらは当時朝鮮の京城府というマチに住んでいて終戦の被害は全く無く、その悲惨な想像も及ばなかったのだ。

ひとは自分が経験しないことはワカラナイのだ。だから平気で悲惨なことは無関係に生きつづける。そしてなければ戦争を起しるわけがない。命令を出す側は主へシモンモトは無関係である。

やう病気になるよ、ごころよぶんかぬいよがある。ひとは孤独だよはにいよまのーひらある。だから思えば泣きたくなるよびらに生まれてくることがありがたいのだ。しまり死ぬいよはごころに思いつくのだ。しまり誰も必ず一度は死ぬのだから。

渋谷へん、早く治って一杯やろ。待ってろ。

(重朝記)

目次

今想う	入来院重朝	1
飢餓や渴きは薬では治せない	宮下 亮善	3
今こそ「文化力」	十五代沈壽官	8
バスキア展	山本 洋子	12
町づくりに思う	水田 丞	15
変革の時代と変わらないもの	米森寿美男	17
笑えない笑いのある川柳	守田 則一	22
炉ばたセイ談会とのつながり	中山とし子	30
宮崎八郎と植木学校 — 歴史を訪ねる旅 (14)		
	下土橋 渡	37
能謡曲と俳句 — 身体で日本語の美しさを体験する		
	梶原 宣俊	51
恩師列伝 — 七人の侍	梶原 宣俊	64
生き方の研究から店仕舞いの研究へ		
	中西 喜彦	78
編集後記	中西・下土橋	86

今想う



入来院 重朝

妻、貞子が亡くなってもう何年になるか、まだ十年は経っていないだろうと、朝夕、般若心経を唱えながら思った。長女の久子が一緒にいるので日常は全く平穩無事である。私が健康で日常何とか自立出来ていると云っても、三度三度のメシは娘が用意してくれているからである。

週に三度月水金は医院併設いうことなしの「のぞみ園」という温泉付きの老人施設に行っている。毎朝夕車で送迎してくれるのでありがたい。大体女性が主で、私が行っている日は男性が三人で、あとは女性のおばあさ

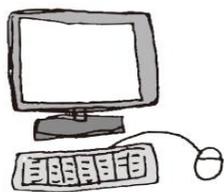
んだ。と云っても全員で十人くらいだ。マッサージ師の男性が専任していて本当にありがたい。老人天国である。

目下世界は大きな戦争が絶えて無いので、ほとんど天国に近いのではないか。世界史上マレに見る状態である。もっともエキ病が発生して適当に人類がマビかれるのは天意であろう。

日常テレビのおかげで世界中のことは大体のところワカッテイル。真実はホントのところどうなのかは又別である。それにしてもテレビとは全く魔法の箱である。居ながらにして世界中のことは見せてくれる万能しもべのようだ。これがたつた百年たらずの間に具現したのだ。このことは当然のようにしてみんな生活しているが、例えば電気が止まったら、つまり停電したらほとんどが一時間もたないではないか、文明人はつまりホントは

カワイイのではないか。現代の魔法の箱コンピュータにしこまれている命令によって万人が生きているのではないか。
生きているという自覚があるうちはいいのだ。しあわせだ。

(炉ばたセイ談庵主)



第6回入来薪能『忠度』（2005年8月27日）より

飢餓や渴きは薬では治せない



宮下 亮善

アフガンを血潮に染めて果つるかな
哲とふその名永久に語らむ

宮下 亮善

アフガニスタン東部非政府組織（NGO）
「ペシャワール会」現地代表の中村哲医師が、
昨年12月4日活動中に、イスラム過激派に

こころざし受け継ぎてこそ果てぬ夢
星の輝き標となりし

大久保洋子

襲撃され、73歳で非業の死を遂げた。妻の
尚子さんは「いつも頭の片隅に案じていたこ
とが現実になった」と。長女の秋子さんも「こ
れが最後かも」と思いながら見送っていたと
いう。「重たい石が私の胸にずしつと落ちてい
く感じで、返事をするのがやっとだった」と
死亡の連絡を受けたときの心情を、妻尚子さ
んは吐露している。死が隣り合わせの日常と
いわれているアフガン。いつかはこのような

昨年12月11日告別式に参列して、中村
哲医師への痛切な思いを託した拙いものであ
る。大久保洋子さんより、すぐさま返歌をい
ただき、ここに紹介させていただきました。
この大久保洋子さんとは、大久保利通公の玄
孫にあたる方です。思い起こせば時と所は異
なりますが、明治の近代国家建設途上、明治

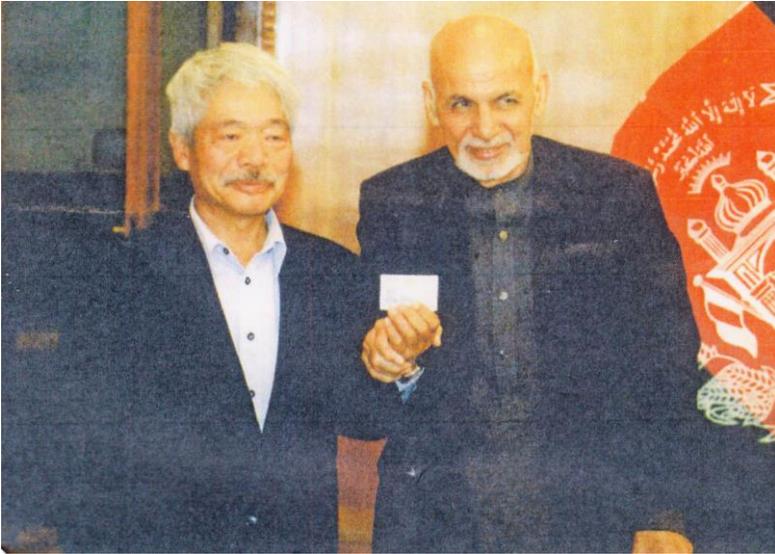
11年5月14日あの『紀尾井坂の変』、非業の死に通じるものがある。まさに、「星の輝き標となりし」その思いだ。

国連の統計によると、アフガンでの戦闘やテロに巻き込まれるなどした民間人の死者は年々増加している。2018年は過去最多の3804人が死亡した。「生きていたら、また会おう」が、現地人の口癖だという。平和な日本ではとても想像できない事である。

中村哲医師は、1984年パキスタンのカイバル・バクトウクワ州の州都に赴任。ハンセン病コントロール計画を柱にした貧困層に携わり、86年からアフガン北東山岳地帯の巡回診療を開始。2000年アフガンは未曾有の早魃により、400万人が飢餓にさらされていた。診療所には、下痢で脱水状態になった幼児を抱いた若い母親が押し寄せて診療どころではない。「飢餓や渇きは薬では治ら

ない」、ここから、清潔な飲料水を確保するために『井戸堀り』がはじまる。その数1600本。02年春からアフガン東部山村での長期復興計画『緑の大地計画』を開始。03年からは灌漑用水路建設に着手し、10年3月全長25キロが開通。

これらの永年の功績により、2019年10月7日首都カブール・大統領官邸にて、ガニ大統領より『アフガン市民証』が授与された。アフガン政府は『最大の英雄』と称えた。「なぜ、あのような人を殺すのですか、とても残念です。悔しいです。」などと、メールや電話をいただきました。アフガンにとっては大恩人です。誰しも日本人ならば率直に思うことですが、残念ながら、豊かになると困る人々がいるという事です。皮肉な言いかたかも知れませんが、貧困がテロの温床になっているという現実があります。なぜなら、豊



2019年10月7日 首都カブール・大統領官邸にて、ガニ大統領より中村医師に『アフガン市民証』が授与された。



カンレイ村の水車。福岡県朝倉市の水車を参考に作られた。毎日1200トンの水を汲み上げている。ちなみに、「マルワリード用水路」は全長24.837km、灌漑面積3000ha。

かな社会に命をかけてまでして金を欲しがる必要はないからです。中村哲医師を襲撃したIS（イスラム過激派）は、アフガン政府とは敵対関係にあり、敵の味方はISにとつては敵という事です。アフガンには「良い人もいる悪い人もいる」しかし、誰であろうとも、清潔な飲料水も必要だし、安心して食べられるものも必要だと。中村哲医師はこのようない事も語っていた。万人が認める素晴らしい行為も、その行為を好ましく思わない人々がいるという事を身をもって知らしめている。

しかしながら、目の前に苦しむ人、嘆く人を看過できるでしょうか。たとえ我が身はどうなろうと、結果がどうであろうと、寄り添い手を差し伸べる事こそが尊い事だと。『一隅を照らす』は、中村哲医師の座右の銘だと。

そもそも、『一隅を照らす』の語源は、弘

仁9年（818年）5月13日、日本天台宗の開祖伝教大師最澄の言葉に由来する。『国宝とは何物ぞ。宝とは道心なり。道心あるの人を名づけて国宝となす。故に古人の言わく、径寸十枚、是れ国宝に非ず。一隅を照らす、此れ則ち国宝なりと。古哲また言わく、能く言いて行なうこと能わざるは国の師なり。能く行ないて、言うこと能わざるは、国の用なり。能く行い、能く言うは、国の宝なり。三品の内、唯言うこと能わず、行なうこと能わざるを、国の賊となすと。乃ち、道心のあるの仏子を西には菩薩と称し、東には君子と号す。悪事を己に向かえ、好事を他に与え、己を忘れて他を利するは、慈悲の極みなり。』

比叡山は「世の一隅を照らす」人材の育成を眼目として、1200年もの永きにわたり仰がれてきた大乘仏教の『母なる山』です。

『大乘』とは、大きな乗り物、自分自身も救われなければならぬが、寧ろ自身のことはさて置き他者を救うことに重きをおいた教えである。宮沢賢治の『雨ニモマケズ』、日蓮の三大眼目『われ国の柱とならん、われ国の眼目とならん、われ国の大船とならん』、二宮尊徳翁の『報徳仕法』、西郷さんや大久保さんは言わずもがな、大楠公の『七生賊滅』等など、すべからく世のため人のため、命をも投げ打って世の安寧を願った人々です。日本という国柄は『大乘精神』発露の国であると言っても過言ではないと思う。

このような伝統精神文化が脈々と受け継がれ、中村医師をして「飢餓や渇きは薬では治せない」その窮状に身を捧げられたものと思われます。人の生き死にに『長短』など問題ではない。『どう生きたかが』大事だと、問われているようである。

一隅を照らす人とは、自らを点す灯明のよ
うな人であり、行動する人のことです。一隅
とは、自分自身の身の回りのことです。自分
が輝けば回りが輝き、社会が輝き国が輝きま
す。悪事を己に向かえ、好事を他に与えた慈
悲の人、行動の人、そのご冥福を衷心よりお
祈り申し上げます。

(天台宗大雄山南泉院住職)



今こそ「文化力」



十五代 沈 壽官

去る7月13日（月曜）NHKの「鶴瓶の家族に乾杯」の鹿児島特集の上映があった。そのクライマックスに登場した父14代、入院氏の電話の場面に対して、全国からの反響は凄まじく、弊社のホームページのサーバーはダウンしてしまった。

私の携帯にも番組中に250件を越すライン、メール、メッセージが飛び込んできた。それらに全てリターンすることは不可能であったが、久しぶりの方々との繋がりも確認できた。あの番組の国民的人気を改めて痛感した次第である。

生前の父14代と、入院重朝先生、それに笑福亭鶴瓶師匠、一流の役者が三人揃った事により見事な流れが出来た。

荒んだコロナ禍の中、久しぶりに気持ちちがホッコリとなる番組で、失われた薩摩の人間力を見れた良い機会となった。

又、これに亡き入院貞子さんの笑顔と故司馬遼太郎先生のエピソードが加わった事で、一気に立体感が出た。泣き笑いのひと時であり、「鶴瓶の家族に乾杯」史上、名作の部類に入る出来栄えだったと思っっている。（身びいきか？）

事ほど、こうゆう時代だからこそ、心温まる感動が必要なのだ。

素晴らしい音楽、圧倒的な大自然の美、絵画や彫刻、舞台など二流の文化が人心を癒し、明日への希望を抱かせる。「人はパンのみにては生きられず」なのである。大切なのは、全

てを生み出す「心」であるはずだ。

多くの方々から「番組を見ていて涙が止まらなかつた」との声を頂いた。凍てついた心が溶けて、熱い涙が溢れてくる。これこそが人を生かす「文化力」なのだろう。

「上質なローカルを高度なアナログで」これが私の経営の信念である。

明治維新150年とは、官による日本均一化の歴史に他ならない。全ての面において、遅れていたと思われた日本を、国際基準を満たす国に向上させねばならなかつた大事業である。しかし、明治という近代国家の誕生と共に生まれた官僚システムが取り仕切る国家は、当然ながら微調整が効かない。「全国一律」が前提なのだから。

その中で、各地に息づいてきた個別の風習、訛り、土地の名産、などなど風土にまつわるものが残念ながら徐々に姿を消していった。

残ったのは代表的なものばかり。

たしかに、津軽弁と薩摩弁では会話は不可能であろう。だから標準語が必要となる。しかし、それは方言を捨てるという事では、本来無かつた筈なのだ。

江戸時代、漢方を学んだ医師たちが、明治に入り西洋医学を学ぶと東洋医学を捨ててしまった。何故、それまで積み上げてきた東洋医学と新たな西洋医学を融合させなかつたのか？

「維新」とは、「これ、新たなり」という意味である。それを、捨て去ると、考えてしまったのだろう。廃仏毀釈もしかりであろう。

本来日本人は「保存と活用のみ」であつた。大陸や半島から渡ってくる人や物や情報を大切に、腐らせる事なく活用する事で社会を築きあげてきたのだ。東の最果ての島に暮らす人々は大陸や半島からの新しい知識を心

待ちにしていたのだ。

江戸時代、世界にいくつが存在した100万都市は日本にも四つ存在した。江戸、京都、大阪、堺。この四つの百万都市は植民地（コロニー）を持たずに、自立して存在した完全なる循環型社会であり、世界に例がない。まさに先進都市であった。

6世紀、朝鮮から仏教が伝来した当初、神道と激しく対立した。それが、蘇我氏と物部氏の争いである。

しかし、その後、源信の往生要集に見られる「天台本覚論」へと至る。すなわち神仏習合であり、「草木国土悉皆成仏」の思想が生まれたのだ。世界に例のない日本独自の宗教哲学である。これにより、末法思想の中で人々は希望を持ち得た。

それが明治という西欧型の近代国家に変わると、西欧のやり方を真似し始める。そ

の中で、それまでの自分達の価値観を否定する様になった。

頑迷な朝鮮王朝や、清国から軽蔑されたのも領ける。チョンマゲを散切り頭に変え、下駄を脱ぎ革靴を履き、肉食を禁じていた人々が牛鍋に舌鼓を打ち、鹿鳴館でダンスに興じる。

しかし、では西洋が「保存、活用」をしないかと問えば、そうではない。ヨーロッパの各都市は第二次大戦で破壊された都市の風景を忠実に再現した。文化遺産は必ず残す。すなわちストックの社会である。昔の日本の様に。

今の日本はどうだろう。文化は民間のやる物だという。しかも、「文化で腹が膨れるか？」というレベルの方も多い。

文化は一朝一夕に作られるものではない。文化とは「way of life」であり、そしてその

文化を共有する個体を「民族」と呼ぶのだ。

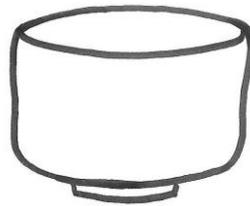
我々は藩を挙げて創り守って来た固有の文化を、「維新」の名の下に捨て去ろうとした。日本を均一化する工程の中で、守らなければならなかった物を遺棄して来た。

今、この様な時代になったからこそ思う事は、文化が地域の意識を繋ぐものであり、その中でも上質な物を伝えていかなければならない。それが「不易」である。

変わらないもの、動かないものがあるが故に、それが不動の指針となり、他を動かすのである。

動くものは動かないものに動かされている、という事を思う時、決して失ってはいけない不動の物が如何に重要か気づく。

この荒んだ人心を潤すものは「文化」である事を強調したい。



バスキア展

山本 洋子



久しぶりに会う級友たちは、懐かしくもあり、記憶のなかの制服の面影はそのままに流れる月日は嘘をつくこともなく、皆それなりに大人になっていた。

去年の秋に高校時代の友人四人と集まる機会があった。一番最後に会ったのは、長女

が産まれたときだから、実に十六年ぶりの再会となった。いつも会いたいねと年賀状のやりとりだけで月日が流れ、私以外の三人はまだ独身でいる。集合の声をしてくれたのは、娘時代に一緒に海外旅行もした友人の通称「うす」である。

友人三人のなかの一人が、成人してから自律神経失調症でながいこと闘病していることもあり、集合場所はその子の家の最寄り駅となった。

西武線沿線沿いの駅前にはこれといってゆつくりと食事をとる店もなく、あまり歩くのも疲れてしまうとのことで、近くのモスバーガーで昼食をとった。

お互いの近況報告をするなかで、うすが「私、バスキア展に行きたいんだよね」とポツリとつぶやいた。バスキア展といえば、あの元 zozo 社長の前澤友作が百二十三億円で所持して特別展示をしている絵画展である。ぼんやりと絵画展のことは知っていたものの、うすのつぶやきで俄然、興味が出てきた。数日後、私は公休日以外は休みがとりづらいついと言ううすの休みにあわせて仕事を休み、一緒にバスキア展へ行く約束をした。

当日、六本木のアマンド前で待ち合わせ、六本木ヒルズ森タワー五十二階へと向かった。実は昔にもこんなふうにくすと二人で、当時百万人以上の来場者があつたと記録されているバーンズコレクションの絵画展へ来たことがある。まだ二十二くらいだった私たちは、国立西洋美術館の長蛇の列に圧倒されて、並ぶのをどうしようかと渋っていると、なんと列を警備している若い男性が、私たち二人を優先的に前へと案内してくれたのだった。いまして思えば、私たちくらいの若い年ごろの娘が鑑賞しに来るのが珍しかったのだろうか。あの時代はまだどこか世の中が寛容だったこと、そしてやはり、若さは財産なのだとこの歳にして思う。

チケットを買い、専用の音声ガイド機器を受け取り、いざ展示会場へ。ニューヨークを拠点として活躍したバスキアの作品群は、絵

画というより正真正銘のアートだった。

写真撮影がオーケーな作品も多く、進んでいくうちにあの前澤氏所持の作品が大きく飾られていた。「これが百二十三億円・・・」鮮やかな水色をバックにダイナミックな構図で描かれた作品を前につかさずスマホで撮影をした。

かなりの展示数を一人でゆつくりと歩いてみてまわった。その後、昼食をとろうと会場を後にし、土地勘のない二人はビルを出たところの地下の飲食街にあるとんかつ屋へ入った。昔と違うところは、久しぶりだからと小ビールで乾杯をしたことだろうか。

それから食事を後にすると、腹ごなしに歩こうとうすが言い出し、六本木から四谷までひたすら歩かされたのだった。昔からどこかへ出かけると歩かされるところは今でもブレずに変わらず、嬉しいような迷惑なような微

妙な心持で歩いた。明治記念館を脇に、赤坂御所のまわりをひたすら歩き、学習院初等科を確認し、無事に四谷駅へと到着した。私はこのまま中央線で国立まで帰ると告げると、彼女は地下鉄で帰るとのことです別れた。かなり疲れたが、久しぶりに昔のように二人で非日常を堪能し満足しながら電車で揺られた。

国立駅からの帰り道、空を見上げると、白っぽい三日月と一番星がつかず離れずの距離で瞬いていた。二つとも全く違っけれど、同じ空の世界にどちらがかけても成り立たない。まるで私とうすみたいだなとぼんやり思いながら家路を急いだ。



町づくりの思い



水田 丞

大学教員という職を得てかれこれ十年を過ぎた。筆者が勤務する大学では、学生たちは4年生になると、卒業論文や卒業設計といって、自分たちで課題を発見し、自分なりの解決を論文や設計提案としてまとめるということを必修で行っている。最近、自分の郷里の建築や町並を対象に、研究や設計課題に取り組みたいという学生に頻繁に接するようになった気がする。例えば、戦前の広島の町並について調べたい、郷里に残る町家について調べたい、あるいは、郷里の町の町づくりを

手掛けたい、といった風である。学生たちは卒業後、広島を離れ、東京や大阪の企業に就職する者も多い。日々新築物件の仕事をこなしているはずであろう彼らや彼女らが、十年、二十年前に取り組んだ卒業論文、卒業設計のことをどのように感じているか、ぜひとも聞いてみたいのだが、未だに果たせないでいる。

地方創成という言葉があちこちで大きく掲げられている。今後、状況は変化するかもしれないが、観光立国の推進は重要な政策の一つらしく、インバウンドという言葉も最近までよく耳にした。以前に比べると、歴史的な屋敷を飲食店や店舗に再生した事例も明らかに多くなった。空き家を活用して地域おこしにつなげようとする試みも以前にはなかったことである。

つい先日、広島県内のある地方都市に出掛けた。近年、瀬戸内海の美しい景色や寺社の

ある坂道、郷愁さも感じさせる町並を求めて全国から観光客が訪れている。町の中心部にアーケード街があり、最近オープンしたであろう空き店舗を活用したショップやカフェが目を引き、観光客でにぎわっていた。一方で、シャツターが下りたままという商店もかなりの数があった。古くからの店だろう。アーケード街の核店舗だったスーパーは閉店し、空地になっていた。地方小都市にあるシャツター商店街の中に観光客向けの洒落たショップやカフェが点在するという状況である。筆者もその日は酷暑だったこともあり、ペットボトルのお茶を求めて少し彷徨ったのだが、あるのは観光客向けのドリンクで（少し値段が高い・・・）、商店街の外れでようやくコンビニエンスストアにありついた次第である。

そこに住んでいる人、そこを訪れる人、両方にとって魅力的で快適な町にしていくには

どうしたらよいか、学生たちと、そして社会へと巣立っていった教え子たちと取り組むことができればと考えている。

（広島大学准教授）



変革の時代と変わらないもの



米森 寿美男

令和二年三月末に四十三年間の郵政人生の終わりを迎え、日々の緊張状態から解放されて悠々自適の生活を満喫しているところであります。入来郵便局長に平成六年に就任して、二十六年間を地域の方々との濃密な関係を維持して、無事に満了して、次の局長にスムーズにバトンタッチ出来たことはささやかな自慢であります。

日本人の平均寿命は男性八一・四一歳、女性八七・四五歳となっているという記事が目に見え込んできた。そして、もう一つは健康寿命というものがあり、男性が七二・一四歳、

女性が七四・七九歳となっている。だんだん年齢を重ねると、こう有りたいと思いつつも、無理が利かなくなつて自分の体に襲いかかってくる恐怖と日々戦っている。入来院重朝さんは一〇〇歳まで生きるのだとおっしゃっていますが、自分はいつまで健康に歩き回れるのか、いつまでゴルフが出来るのかと、健康に対する話題が中心となる世代になったことを実感しています。

変革の時代と呼ばれているが、確かにすごい勢いで様々なものが、日進月歩の時代から秒進分歩の時代へと変わってきています。

一、出会ひ

入来郵便局長時代に入来院重朝さん、貞子さんとの出会いから、色々なことに参加させていただき、入来町の歴史などを勉強する機会を与えていただいたことに感謝しています。パソコンが流行り始めた頃からメールやホー

ムページなるものを我々よりも先に使いこなしておられたことに大変びっくりしてしまいました。貞子さんが変革の時代にふさわしく、新しいことをどんどん取り入れて行かれる姿勢は本当に素晴らしく、自分も少しでも真似したいものだと思つたものでした。

入来町の歴史を勉強する上では、朝河貫一先生の「入来文書」を知る必要があると思つていたら、矢吹晋先生の現代語訳出版記念講演会や「The Documents of Iriki」の購入などもこの付き合ひのお陰であると思ひます。

この本は絶版となつており、相当な値段が付いているようです。また、親子で参加した清色城の散策のあとに入来院邸で子供達との焼き肉会を開催していただき、伝統的建造物群の incoming 町作りや、山城の頂上からの眺めや、難攻不落の仕掛けを随所に集めた城のすばらしさを堪能させていただきました。

二、「薪能」

そして何よりも驚ろかされたのが、変わらないものを伝承するという「薪能」の開催でした。私も第一回目から参加させていただきました。初めてのものを作り出すという大変さをメンバーの皆さんと味わうことが出来ました。第四回と第五回を実行委員長として取り組ませていただきました。この時期は、入来町の観光協会長を仰せつかつていたことから、夏祭り実行委員長を引き受けており、これが八月の盆過ぎに一週間毎に開催されるという超過密スケジュールとなつており、両方とも屋外で開催されることから、天気心配が心を痛めつけ、高熱を引き起こしてしまったこともありました。「能」と言うものになじみのないメンバーばかりだったことから、静けさと国宝級の演舞者のすり足と鼓と笛の音色、ワキの方々のかげ声に圧倒されたと言うことが正

直な感想でした。このイベント開催に向けた打ち合わせから早朝のポスター貼りやら、チケット販売など開催までの困難さは凄かったです。貞子さんの熱意は並々ならぬものがあったと思います。ポスター作成やポンサーの確保、宣伝方法も地方自治体の訪問など大変な作業をどんどんこなされていたことに敬服してしまいました。何と言っても大変だったのは、開催が真夏であり、まだ今ほど熱

中症が叫ばれていなかったと思いますが、開催場所が小学校と言うことから、夏休みしか利用できなかったこともあり、この時期しか開催できなかったことです。そして、「薪能」なので、薪を燃やすことにも大変な苦労がありました。如何に着火させるか、どれくらいの間隔で薪を充填するのか、煙がどのように流れるのかなどを検討したりして、様々なことを学ばせていただきました。何回目であつ

たか、薪能の終了を見透かしたかのような土砂降りの雨がふり、その中でスタッフの慰労会の開催や川内総合運動公園での「鳥追いの森」の上演の時のカメモシの大量発生など毎回様々な出来事があり、貞子さんの思い出と共に本当に懐かしく思い出します。三木会(第三木曜日の会合)に参加するようになり、貞子さんの餃子や鍋料理が懐かしく思い出します。

三、変わらないもの

大河ドラマで「西郷どん」が人気であった頃、郵便局に勤務していて、明治維新一五〇年という節目の年が訪れた時がありました。

戊辰戦争で会津藩と長州藩が戦って、その後なかなか手を握れなかったので、間に薩摩藩が関わって、何か郵便局として出来ることは無いかと言うことが発端でした。平成三〇年八月に東京中央郵便局KITTEビル地下一



清色城跡に登った後のバーベキュー（2007年5月）。左から2人目が筆者。



会津若松・薩摩川内・萩の観光物産展（2018年8月）にて。中央が著者。

階において、会津若松市・萩市・薩摩川内市の観光物産展と、ご当地の四季を題材とするフレーム切手をセットにして発売するという機会を得ました。全国郵便局長会は十二の地方会で組織されていますが、たまたま東北地方会が福島県南会津郡、中国地方会が萩市、そして九州地方会が薩摩川内市の局長が、地方会長を務めていたことから、話がまとまり、それぞれの行政を動かし、開催することとなり、郵便局が地域とともに発展することが出来ることを確信することが出来ました。お客さまの中には、会津が長州と一緒に物産展をやっていることに大変びっくりされておられました。大変大きな事業が出来たことに、苦労も大変でしたが、変わらない付き合いが出来たこと、素晴らしい思い出が出来て、大きな収穫を得ることが出来ました。

（元入来郵便局長）



第7回入来薪能『巴』（2010年8月28日）より

笑えない笑いのある川柳



守田 則一

一、はじめに

盤寿を3年前に過ぎた筆者は現在福岡の地で町医者としてその日暮らしをしている。

思うに鹿児島で医学を学んだが、鹿大医学部の前身の薩摩医学には歴史がある、それについてはまたの機会にするが、明治維新の頃、西郷南洲先生の元で活躍した英国の医師ウイリアムウイルスのイギリス医学の伝統を誇る薩摩医学では、脚氣論争で森鷗外と対立し、その正しさを証明したウイルスの弟子海軍軍医高木兼広の名を挙げるだけで十分である。

筆者は薩摩の地で20年有余医学を学び、その地で多くの知己を得た。それ等を財産として、福岡大学に転出して永い間教職にあった。その後、大学の教職を離れ、町医者になった。あまり流行らぬ老医故に、大学時代の診療・教育・研究というめまぐるしい日々と比べ、じっくりと考える時間がたつぷりと有り余るようになった。患者が途切れる診療時間を有効に使うべく、診療机に着いたまま出来る趣味として川柳を始めた。カルテは診療記録よりは、川柳の走り書きの方が多いことがある。うっかり消し忘れて監査の時カルテには診療結果以外を記載してはいけないと指導を受けたことがある。

それはさておき、川柳は誰からも手ほどきを受けたこともない全くの我流である。五七五の一行詩のうち、何故に俳句でなく川柳を選んだかと言うと、開業を決意した時の筆者

は古代希な年齢にさしかかり、その歳になつて、季語を勉強するには遅すぎると思つたらである。しかも、大学受験勉強時代、国語の先生の俳句の知識と特に季語や語彙の豊富さその腕力は嫌と言うほど知らしめられておる。その先生方に限らず、大学で国文学を専攻する方々も俳句を作られる、評価は同じ土俵になる。最初から勝負はついている、降参である。やはりやる限りは当然同じ土俵で勝負するのが日本人として当然のことである。

その様に考えたなら、今更古稀の手習いではないと俳句への挑戦は諦めて川柳を嚙つて十余年が経つた。季語のない川柳ならば、また川柳は口語でよい、通常の語彙でよいとなれば年寄りでも過去の知識が生かされるであろうと勝手に考えて始めたのであるが、そのベースには筆者が後述する医学部の学生のととき、南日本放送MBCで放送された薩摩狂句が下

敷きになっている。しかし、始めてみて全てそれらが誤解であることに気づいた。その奥の深さ何一つを取り上げても簡単ではない。その中でも小生が最も簡単に考えていた笑いのある句というのが実は最も難しいと言ふことを思い知らされたことである。そこからこの随想が始まるのである。

二、笑いについての先人のさまざま(1)

脳科学者の茂木健一郎は、現在の脳科学の知見でも「人間はなぜ笑うのか？」の答えは用意されていない。笑いのメカニズムの全容は解明されずにある。笑いは未だ神の領域に属している⁽²⁾と述べている。言うまでもなく筆者もここで笑の医学・哲学・心理学・文学等々について議論するつもりは毛頭無いし出来るはずもない。それは「ただ一人無知な男がそれをなしとげるのみである」⁽¹⁾とマルセル・パニョルが書いてるので、議論の

責任を彼に押しつけて、筆者はこの問題の学問的議論は回避する。ここでは筆者の前提となる笑いについて先人は、どのように考えてきたのかを議論することは、パニョルの『笑い』の翻訳者鈴木力衛の解説（文献（1）のp105）に登場する人物をみても向こう見ずの企てであることが分かる。鈴木は翻訳後の解説では、笑いの学説は歴史的には、プラトン、アリストテレス、キケロの考えから、出発して近代的な笑いの理論が生まれたのはホップズ以後のことで、そしてデカルト、ベイン、スタンダール、ボードレール、ダーウイン、フイエ、グロースらの説はこの流れの中にあり、19世紀になって、ショーペンハウエル、カント、フロイト、ベルグソン、などであり、彼等は矛盾もしくは対立の内に喜劇的な要素を見出そうとしたとある。しかし、これを説くためには原典を当たらねばならな

い。これはライフワークであり、一川柳好きのなせる技ではない。引用の原典を参照願うことにして筆者の拙い表題の随想へと進むことにする。

何はともあれ、筆者は或る川柳雑誌のいう「笑いのある句」いうのがどういう句であるのか理解出来ないことから笑いとは何かと改めて考えただけの事である。どのような句が川柳で言う笑いのある句なのか、笑いのある句が掲載されている限りはそれは笑いのある句に違いない。しかし、これを読んでも筆者は殆ど笑えない。笑いに對する生理学で言う閾値が一般の人と比べてずれているのだろうか、筆者が少し可笑しいのかも知れないと思ったりもした。しかし、寄席を聴いても笑えるし、ユーモア小説を読んでもゲラゲラ笑える。

では、これらと何処が違うのか、ニーチエ

はどんなふうに笑うか、どんな場合に笑うか、そこには人間性がはからずも表れる^③。

例えば人の失敗をおとしめて笑っているのか、意味合いのおかしさを笑っているのか、洗練された機知を面白がっているのか、と言うことであるといっているが、筆者は川柳の場合どうも後者を理解する能力が無いのであろう。雑誌に投句すべく何とか笑いのある句を作りたいと思っている筆者は真剣に悩んだ笑いのある句という欄がある限り、編集部にはそれなりの考え、あるいはたくらみ、定義みたいなものがあり、選者もそれなりの概念に基いて選考した結果の句が掲載されているに違いないと思いきその雑誌で笑いのある句はどのような概念のものを教えて貰いたく、次のような文を雑誌社に投稿した、勿論見事に没になった、その投稿文をここに再現しそれを叩きに少し考察を以下に進める。

三、著者の投稿し没となった笑いのある川柳論

筆者が某川柳雑誌に投稿して没になった文面を再掲すると以下の如くである。

「ベルグソンは笑いとは何を意味するかを問うた。・・・(略)・・・笑いは哲学・心理学・医学・文学の永遠のテーマでもある。おかしさがあって笑いがある。そのおかしさの根底の共通項は何か。・・・(略)・・・美は対象にあるのではなく心にあると言われるが、美を笑いに置き換えても同様であろう。笑いは川柳の得意とするところであろう。しかし筆者には一番難しい。少なくとも笑いであるならば笑いの源泉がある。笑えない悲しい句も自己を笑えれば笑いと取るなら、悲しみも笑いと同義語である。笑いは人間だけのものであり、置かれた社会環境の中で人間は笑う。笑いは習俗を懲戒するとも小生は考え

る。川柳の笑いは元来の笑いの概念を越えた広義の概念を持つと掲載句からは読みとれる。笑いのある川柳論を詳しく知りたい、未熟者の小生にも分かる様に本誌で取り上げて頂けないだろうか。」と。

しかし、その後筆者の疑問に答えるような話しはその雑誌ではみることはないが、毎号笑いのある川柳コーナーの投句の募集はある。したがって、筆者の笑いのある句とはどんな句を言うのかの概念は掴めないままで、疑問は未だに解決していない。それで、川柳の笑いのある句という縛りを離れて、元来笑いと何なのであるかと考察するのが一つのテーマとなった。

四、笑いの要素

上述の如く笑いと言えばベルグソンが通常バイブルになるので、彼の考えを引用してみる。彼は笑いとは何を意味するものである

うか？笑いを誘うものの根底には何があるだろうか？おかしさを生む空想力を一つの定義の中に閉じこめるつもりはないと、笑いの第1章の冒頭で述べている⁽⁴⁾。長谷川正昭は『笑いと癒しの神学』で、笑いはいうまでもなく、人間の喜怒哀楽の感情や情緒に関わるものである⁽⁵⁾が定義することはむづかしい、十人十色であると言っているが、これはベルクソンと一般である。

おかしさは純粹知性に訴えかけるものである。この知性は他の知性との接触を維持していなければならないというが、ショウペンハウワーは「笑いは、知的コントラスト、感ぜずにはいられない不条理」と言っているのも同じ文脈であろう。笑いは反響を必要としている。一つの集団の笑いなのである。一緒に笑う人たちが分かち合っている、殆ど共犯関係と言ってもよいものである。川柳でも笑

いがある限りそこにはおかしきがある、また、私たちが笑わせるのは何故か笑いを理解するには、それを社会という、笑い本来の環境の中に置き戻さなければならぬ。

これらを煎じ詰めれば、雑誌に掲載された川柳が笑えないのは、上述の笑いの要素を持つているに違いない笑いのある川柳を、概念として理解し得ないか、あるいは感情としても笑いを受け入れる素地がないと言うことにもなる。しかし、筆者は冒頭に述べた如く、以前MBC南日本放送の薩摩狂句の時間はいつもこの句を聞いて吹き出し、気分転換と自分自身の発見に大いに役だった。確かそれが始まったのは昭和33年で、時代的背景を考慮せねばなるまいが、それは筆者が医学部3年生のときで、何でも詰め込み主義の医学教育と学問のあるべき姿との間の矛盾を感じている頃であったので、薩摩狂句の笑いがどれ

だけ自分を救ったか分からない。カントは人生の苦勞を持ちこたえるには三つのものに立つ。即ち、希望・睡眠・笑いと言っている。当時の自分は薩摩狂句がカントと重なった日々であった。

その頃の要因が今の小生の心情に影響しているせいも、川柳誌の笑いある句の本質が理解出来ないままなのである。薩摩狂句は当然薩摩の地を背景としてある。薩摩の地は独特の民度がある、ジゴロでしか理解出来ないものがある。そのユーモアのセンス一つにしてもひと味も二味も違う、一種独特のものである。その背景にある薩摩文化の持ち味である。薩摩狂句は独特のエートスの背景を持つものでこれをここで民度と呼ぼう。薩摩狂句には笑いの要素がたっぷりつまっている。それにどっぷり浸った小生は関西系や関東系の川柳の持つ笑いとは何処かにはずれがあるの

かも知れない。しかし、鹿児島には全国的に有名な川柳の大家が沢山おられるので、薩摩狂句と薩摩の川柳を混同してはならない、これは別物であるというお叱りを受けるかも知れないが、笑いの本質は変わらないと思う。

それはモリエールの喜劇と川柳は違うと言うのと一般で、ベルグソンの言う笑いはあくまでも笑いに対する考察であり、文学の形態が異なっても笑う本態である人間は同じ人であり笑いそのものは変わらないと思うのである。柳田国男^⑥は、笑いとは何であるかを知るためにはかつて如何なるものを笑っていたかという問題から始めなければならぬと言っているが、時代的背景も無視出来ないと言うことも知れない。本邦にもいろいろ笑いの文学がある。柳田国男は芭蕉の俳諧の中に笑いの源泉をみているようである。時代を遡れば瘤取り爺さんの話から、枚挙に遑がない。

笑うのは個人の勝手で、笑わないのも同じく個人の勝手で、理屈は要らぬと一応納得して筆を置かねば、笑いの議論は延々と続くことにもなる。この辺でピリヨドを打たないところの随想もオープンエンドとなる。

五、終わりに

友人の中西博士から頂いた原稿募集のお手紙には武漢コロナと日本のあり方云々とあり、小生も、医者of端くれとして、新型コロナ収束と免疫について、笑いの持つ免疫力との関係を川柳の笑いの効用としての笑いの医学を筆者は論じたかったのであるが、前提の議論が膨らみ、途中で止めにした。笑いの難病に対する治癒力の参考文献^⑦を一つだけあげるに止めて、いつか、中西博士とは差して話す機会があればそれを改めて纏めることにして、ここではペンを置く。

(もりた内科・胃腸科クリニック院長)

【参考文献】

- (1) マルセール・パニヨル(鈴木力衛訳)、
笑いについて、昭和28年、岩波新書
- (付録) スタンダール、笑いについて―困難
なる問題に関する哲学的な考察
- (2) 茂木健一郎、笑う脳、アスキー新書、
2009年 東京
- (3) フリードリッヒ・ニーチェ(白取春彦
編訳)、超訳ニーチェの言葉、デイスカバ
ー社
- (4) ベルグソン(増田靖彦訳)、笑い、光
文社古典新訳文庫
- (5) 長谷川正昭、笑いと癒しの神学、ヨベ
ル出版、2019年
- (6) 柳田国男、不孝なる芸術・笑いの本願、
岩波文庫
- (7) ノーマン・カズンズ(松田鉄訳)、笑
いと治癒力、岩波現在文庫



炬ばたセイ談会とのつながり



中山とし子

「炬ばたセイ談会」とのつながりを書く前に、主宰者である入来院重朝氏御夫妻との御縁ときっかけを、まず書かせていただこうと思う。これまで、他県に住んでいる私がなぜここにいるのか、会員の方々にきちんと説明する機会がなく、冊子とのつながりだけで日が過ぎてしまった。私は、二〇〇一年の二月、入来院家を唐突に訪問したことがあります。その理由を説明するために、自分の係累のことを書くことをお許しいただきたい。

二〇一五年に九十三才で逝った父は、私が五十一才(二〇〇一年)の頃まだ元気だった。

父方の曾祖父は、下手の今村どんから中島家に養子に入った人だったそうで、次の代の祖父に当たる人は、同じ今村どんから養子に入った今村家の末っ子であったと聞いている。ややこしいのだが、実兄の養子先である中島家に、末っ子の祖父が養子に入り代を継いだことになる。二人とも大酒飲みであったため、今村家から追い出されたと父が冗談のように話していた。祖父と曾祖父は兄弟の間柄であったが、長男と末っ子だったため、年齢は親子ほど離れていたものと思われる。親戚であった証拠に、小学生の頃までは、お正月、お盆の度に祖父の実家である今村家を訪問して御馳走を頂いていた。その家に、巻物形式の家系図があるというのが父の自慢で、巻物が八畳間に入らないので、端から端に敷き返し広げて、何度か見せてもらった、と周囲に話した。長年月経っていたせいで、臭かったそ

うである。本当だろうか、と従弟たちに聞いてみたところ、彼らも同じ話を父親から聞いたそうである。

父は、若い頃はこんな話などはしなかった。だから、自分の出自にあまり興味はなかったのだが、人生の終末期が近づいた時、父が実家の仏壇の整理や家系図の整理をするようになり、今村の家系図のことを思い出したらしかった。その家系図が、曾祖父と祖父の出身である今村家の主人（父からは従兄にあたる）が亡くなってから見えなくなった、というのが父の悩みだったので、本当かどうか確かめてみたくなった。と言うのも、そのころ、私は『入来文書』『近世入来文書』を佛教大学と奈良女子大学で手にして、興味深く内容のあれこれを読み、我が故郷の立派さに大変感動していたので、気持ちはいくいく前に進んだ。自尊心を満足させようとか、そんなつまらな

い気持ちはなく、ただ、本当のところを知りたい、と強く思った。元々、真実追求型という面倒な性格だ。

「庶流今村家文書」と家系図は、朝河貫一原編の『入来文書』にはないが、阿部善雄、古川常深、本田親虎編の『近世入来文書』には、かなりのページをさいて詳しく載せられている。この今村家とは、入来麓の今村家のことである。下手の今村家とは、遠い昔は関係があつたのかもしれないが、今は親戚付き合いもない、との話だった。後に麓の今村家と親しい方とお電話で話して自分なりの直感を得たが、今は述べない。因みに、今村家系図の最後は十六代純義になっているが、下手の今村どの父の従弟の名は、純忠であった。しかし、もうどうでも良いではないか、という気持ちがある。歴史とは、こういうことなのだろう。今村も実家の中島も早々と更地に

還ってしまったことだし。

と、今はこのように思えるが、当時は、もう少し家系図の行方を確かめたいという気持ちがあった。『近世入来文書』の編纂をされた方々はすべて亡くなっておられ、どなたに聞けばわかるだろうか。ある人が、入来院さんはどうだろう、と言ってくれたので、失礼も顧みず勇猛果敢に入来院家を訪れた、という次第。何か目新しい情報でもあるのではないかとまるで新聞記者のような心持ちになっていた。

茅門を入ると大きな玄関があり、

「さあさあ、上がりなさい」

と奥様の貞子氏がおっしゃって下さり、まず自己紹介から始め、早速下手の今村家のことをお尋ねしたが、ご夫妻共に、全く本当に何もご存じなかったばかりか、却って面食らった様子でいらつしやった。壮年時代には入来



入来院御夫妻と著者。平成13年（2001年2月）茅葺門邸にて

にいらつしやらなかつたわけなので、それも無理はないと思い、それ以上の追及はやめ、諦めた。勢い込んでいたのがっかりしてしまつたが、それよりも貞子氏の小説の話とか、能の話とか、短歌の会の話とかで盛り上がり、結構長居してしまつた。重朝氏が奥様のことを真から誇らしく思つていらつしやることも、お話の中で何回も出てきた。この入来院家訪問は、自分の人生の中で自ら積極的に動いた数少ない経験だつたが、残念ながら目指した進展はなかつた。

拝受して帰つた『鹿児島の女性作家たち』

『貞子の語る入来文書』などの御本を拝読すると、貞子氏は、真つ直ぐな、なかなかの人物であることがわかつた。まず心を打たれたのが、突然訪ねて来た初対面の若輩者に対して、貞子氏が垣根を作らず、偏見を持たず忌憚なく語つて下さつたことだつた。この感覚

は、外国人や一部の禅僧の方々には普通に経験しているが、女性では珍しいし、後に、エッセイ集『茅門のある町から』を読んで、納得したのだった。貞子氏の文章は、本当に率直で正直である。隠し事なし。私はここが、誰であろうと、たまらなく好きなんです。

貞子氏からは、奈良に帰つてからも入来花水木会へのお誘いが何回かあつたが、まず住居が離れていること、俳句をやつていたこと、当初の目的は達せられなかつたことで、簡単に入来院家からは遠ざかつたことになる。

ところが、やはり御縁はあつたものと見えて、次に入来院氏とつながつたのが、下土橋渡氏の「ワシモのホームページ」だつた。

唐突な訪問から十年後の二〇一二年に入来大宮神社の「神舞」を調べている過程で、目を見張るような素晴らしいホームページに行き当たつた。入来神舞の沢山の写真が臨場

感溢れる美しさで惜しげもなくホームページ上に広げられていた。写真の美しさは秀逸だが、県内外の様々なところを訪れてその報告が写真と文章でつづられていたり、地域の歴史的行事と人物描写を詳しく取り上げておられたり、まるで自分がその場にいるような臨場感。読んで見て飽きなかった。入来の新名の写真も沢山アップされており、長く故郷には帰れなかったから、あの入来院貞子氏が入来でこれほどの大活躍をされていたとは、改めて感動した。

その後ワシモさんに連絡させていたただくには勇気がいったが、どのようないきさつだったか、『炉ばたセイ談』七号、八号、平成二十三年秋号と二十四年秋号を送って下さった。これが、『炉ばたセイ談』との初めての御縁なのに、七号は、貞子氏の追悼文集になっていた。貞子氏は、二〇一一年（平成二十三年）

五月に、突然のアクシデントでご逝去されていた。言葉がなかった。

七号の中に、渋谷繁樹氏の「オヒイサマの電子郵便」という文がある。今開けると、当時鉛筆で線を引いたりして、感じ入った痕が見える。渋谷氏の文ではなく、渋谷氏が表現された貞子氏その人に。

〈率直果敢、修飾無縁、……鋭利な舌鋒は切りまくった〉と、勇ましい。また〈躊躇も遠慮も心配りもない〉と親しいからこそ、型破りな先輩への憧憬にも似た表現もあり、それは貞子氏の人間性を論じているのではなく、頭脳の働きが良すぎて周囲がついて行かないほどの対象への深い洞察と分析力がそうさせるのだろうな、と思わせる。このような人はしばしば誤解されるが、対象を正確に真っ直ぐ見ることは、何よりも物を作り文を書く人間に必要なことである。

ワシモさんから頂戴した『炉ばたセイ談』誌の特徴を面白いと思った。各自、書きたいことを書けばよい、と重朝氏の文にあり、八号の重朝氏の「もどき雑考」は共感と共にくすくす笑いながら読んだ。ほかに、中西喜彦先生の「牛の一生から男女の役割を考える」は、珍しい知識が沢山あり、理系の方の論証の仕方が面白く、赤線を引きながら夢中で読んだし、下土橋氏（ワシモさん）の「庄内憧憬」には、藤沢周平のフアンの一人としても深く共感した。右も左もない、それぞれが自分の考えを率直に書く、ここに愉快なものを感じ、仲間になりたいと思った。会員の方々は、どなたもその道の一流の方々ばかりなので、いつの間にか自分も勘違いして、学生時代から興味のあった謡曲にはまったりして、中西先生に助けていただきながら「鶴亀」を謡ったのは宝のような思い出です。



中西喜彦先生と「鶴亀」を謡う著者。令和元年（2019年）10月炉ばたセイ談会にて

二〇二〇年七月。私は、愛知専門尼僧堂の堂長、青山俊董老師あおやましゅんどうから在家得度を受けました。道名と戒名を頂戴し、絡子ろくす（御袈裟を縮小して胸から塔けるようにした仏具）を縫ったり縫い方を教えたりして、仏弟子として生きる努力をしている毎日です。ここに至るまでには、セイ談会の御縁だけで、南泉院の宮下亮善和尚様を、これも唐突にお訪ねしてご

迷惑をかけたこともありました。人生のどん
づまりにおり、「頭も剃ります」と放言したと
思う。ミヤンマーの小学校建設の場にご一緒
したいと申し出ていながら、色々な事情でそ
れも果たせぬ間に十年が経ってしまった。思
えば、炬ばたセイ談会には何の貢献もしてい
ないのに、大いなるものをたくさん頂いてい
る。貞子氏がワシモさんをこの会に引っ張っ
て下さったおかげで、炬ばたセイ談会との御
縁につながったことを改めて有難く思います。
入来院貞子氏とは、マルチな才能を持ちな
がら、人への態度は上も下もなく、右も左も
なく、突き抜けた大いなる人間性を存分に発
揮されて悠々とこの世を楽しんで行かれた方
であったのでしよう。 合掌

(エッセイスト)



らくす
絡子

(御袈裟を縮小して胸から塔けるようにした仏具)

宮崎八郎と植木学校

— 歴史を訪ねる旅 (14) —



下土橋 渡

征韓論争で政府が分裂し、西郷隆盛、板垣退助、江藤新平らが下野した年の翌年、明治7年(1874年)に佐賀の乱が勃発します。風雲急を告げるこの年に、ルソーの「社会契約論」の部分訳である中江兆民の「民約論」を泣きながら読んだ23歳の宮崎八郎という、肥後国玉名郡荒尾村(現熊本県荒尾市)出身の男がいました。ルソーの社会契約論は簡単に言うと「国家は人々の契約の上にあると考える政治思想」で、フランス革命の理論的根拠になったものです。

「これぞ自由民権のよりどころ」と叫んだ

八郎は、翌明治8年(1875年)、植木(熊本市植木町)に「植木学校」を設立します。入学してきた50〜60名とも80名ともいわれる熊本城下の士族、熊本県北部の郷土の子弟に、ルソーの「民約論」や頼山陽の「日本外史」、福沢諭吉の著書などをテキストにして、自由民権思想を教えます。ところが、授業ばかりでなく、県民会の開設要求や戸長(現在の町村長にあたる)の公選要求を行い、戸長征伐の指導的役割を担うなど、過激な活動が県を刺激したため、当時の県令(現在の県知事)によって植木学校は開校半年で閉校させられました。

明治10年(1877年)に西南の役が勃発すると、八郎は熊本協同隊を結成しその参謀長として薩軍方につき参戦します。協同隊は2月21日に薩軍と川尻(熊本市)で合流。

一方、政府軍は薩軍の補給路を断ち、北と南

から薩軍を挟み撃ちにするため3月19日に二見洲口の海岸（熊本県八代市）に衝背軍を上陸させます。そこで薩軍本営は、政府軍の背後に回り込んで挟み撃ちにすべく、別府晋介らとともに、宮崎八郎に八代行きを命じます。4月6日、球磨川の萩原堤（熊本県八代市）で八郎戦死。志半ばの27歳でした。

徹底した「官嫌い」な八郎ではありませんが、西郷が自由民権論者ではないことを百も承知の上で何故薩軍方として西南の役に参戦したのか。西郷にいったん天下を取らせたのち、西郷と競って天下を取る、新時代に臨む宮崎八郎という男の構想は遠大なものでした。

八郎の死を知ったときの父・政賢まさひさの怒りはすさまじく、庭に家人を集めて「一生『官』のメシを食ってはならん」と怒鳴りまくったと言われます。八郎の生き方は、宮崎民蔵、宮崎彌蔵、宮崎滔天とうてんの3人の弟たちに大きな

影響を与えました。弟たちは、事あるごとに「豪傑になれ、大将になれ」「アニさまのようになれ」と言い聞かされて育てられたといわれます。アニさまとは八郎のことです。

宮崎八郎戦没の地、植木学校跡、山鹿の光専寺、宮崎兄弟の生家を訪ねました。

一、宮崎八郎戦没の地

八代城（1622年竣工）が球磨川の河口部に建設されたとき、球磨川の洪水から城下町を防護するために築造された堤の一つが萩原堤で、景勝の地として知られています。その萩原堤に司馬遼太郎氏の書による宮崎八郎戦没の碑が建てられています。碑文に以下のようにあります。

此処萩原堤一帯は明治十年西南の役に於て田原坂と共に多数の死傷者が出た激戦地である。当時熊本協同隊の参謀長であった宮崎八郎は薩軍を援助して奮戦したが四月六日の



宮崎八郎戦没の碑（熊本県八代市萩原堤）



球磨川と「名勝・萩原堤」の標柱

拂曉遂に此の地で戦没した。時に弱冠二十七八歳であった、因みに後年中国革命の父孫文と交友深く活躍した宮崎滔天はその実弟にあたる。茲に一同相諮りその遺跡を後世に伝うべくこの碑を建立するものである。平成元年四月六日。八代市萩原老人クラブ。

二、植木学校跡

熊本市植木町の植木小学校近くのマンシヨンの駐車場に隣接して「植木学校跡」という石標と説明板が立っています。自由民権運動家・宮崎八郎は、平川惟一らと、熊本民権党の組織化をはかり、その同志たちの結束と民権主義者の育成拠点として、「植木学校」の開校を計画しました。明治8年（1875年）年4月、許可を得て、旧正院手永会所跡に變則の県立「植木中学校（通称、植木学校、公式には熊本第五番中学校）」を開校。教科書には文明史、万国史、万国公法、万法精理（モン

テスキュー）、自由之理（ミル）、民約論（ルソウ）の翻訳や日本外史、日本政記の漢籍、福沢諭吉の著書などが使用されたといわれます。説明板に以下のようにあります。

同校は宮崎八郎等の熊本民権党が中心になり設立、運営した極めて先進的な学校で、中江兆民の訳によるルソーの「民約論」を経典とした。自由民権主義者の養成所として植木学校の名は高まり、盛時には80名近くの若者が在籍していたという。しかし、鹿児島市学校と気脈を通じ、戦闘訓練を行なう等したことから、県と反目して補助金を打ち切られ、同年10月末、僅か半年で閉校するに至った。同校の関係者は城北の農民一揆「戸長征伐」を指導、明治10年の西南の役では熊本協同隊を組織して薩軍に参加し、後には自由民権思想の普及に尽力した。平成三十一年三月 熊本市。



植木学校跡・石標と説明板（熊本市植木町）



植木学校（変則第五番中学校跡地）の石標

三、光専寺

熊本県山鹿市に光専寺という浄土真宗本願寺派の寺院があります。かつて一万人集会の場となったお寺で、西南の役が勃発すると薩軍野戦病院になりました。また合戦中、山鹿の町で熊本協同隊の有志によって自治制の試みがなされた時、寺の一室を借りてその会合が行われたといわれます。

一万人集会というのは、当時城北各地に地租改正と民費増徴等のかたちで収奪が強化されたため、それを不満とする農民の騷擾そうじょうが次々に起きましたが、その総決算ともいべき大抗議集会でした。それをリードしたのはかつて植木学校に学んだ民権党の連中でした。郡内の戸長役場はそのために動揺し事務処理も出来ない状態になりました。県ではそれを鎮圧するため集会禁止令を二回にわたって出し

ましたが一向に収まらず、郡内外を合せて一万人が集まったといわれます。農民たちの気迫に押されて、責任のある戸長等を嚴重に処分することが約束されました。農民たちは歓声をあげて解散、数日後西南の役が勃発すると、騷擾をリードした民権黨員は熊本協同隊を組織して薩軍に参加しました。

いかにも民権組織らしく、協同隊の幹部役員は投票により選出されました。小隊長は平川惟一（総指揮長）で実質的な最高司令官。本宮付は協同隊本部を構成し、参謀長の宮崎八郎は薩軍との連絡調整に当たりました。協同隊の結成が知れると、たちまち入隊希望者が押しかけ、最終的に四百人を超えたといわれます。

平川惟一の率いた協同隊は二月二十三日、薩軍の先鋒として熊本を出発、豊前



光専寺山門



山鹿の町並みを彷彿とさせる光専寺の門前通り

街道を北へたどって翌日山鹿に入りまし
た。桐野利秋の率いる三個小隊が二日遅
れて到着。薩軍は、桐野利秋が総帥とし
て、最強の四番大隊を主軸とする軍団と
熊本協同隊、飢肥隊を率いて攻勢防御の
体制をとりました。二月二十六日から三
月二十一日までに官軍と会戦すること五
回。山鹿は久留米から兼松を経て植木、
熊本に南下する道路の中間にあたる重要
な拠点であり、山鹿口の戦は田原坂の戦
と同様激戦であったといわれます。

さて、この合戦の間、山鹿市街地はそ
こだけポツコリ穴が開いたように割と穏
やかだったそうです。このとき、熊本協同
隊の有志は、自治制という画期的な実験を行
いました。民政官を決め、人民総代を選挙で
選出し、民政官は人民総代とともに自治政治
を行うという構図のものでした。「鹿児島本営

代理熊本協同隊」の名で「総代」（区長の職掌）
や「総代属」（村用係）の辞令が交付されまし
た。「人民保護兵」という辞令もあったそうで
す。多くの集落で三月中旬に普通選挙が実施
されたようですが、その直後、田原坂を政府
軍に突破されたため、協同隊も山鹿撤去を余
儀なくされ、彼らの理念が現実に着するこ
とはありませんでした。

四、宮崎八郎

嘉永4年（1851年）、肥後国玉名郡荒
尾村（現熊本県荒尾市）の郷士・宮崎政賢・
佐喜夫妻の次男として生まれます。夫妻は八
男三女をもうけましたが、長男、四男、五男
が早世、三男伴蔵も未成年（19歳）で病死。
したがって、次男八郎、六男民蔵、七男彌蔵、
八男滔天を宮崎四兄弟といっています。

幼くして漢文に才を発揮し、神童と呼ばれ
た八郎は、12歳で熊本城下の月田蒙斎塾（剛



宮崎八郎 (1851~1877年)

毅質直、徳性を養うことを重視した)に入門。蒙斎の推薦によって14歳のとき藩校時習館へ入学。郷士としては異例のことでした。19歳の明治3年(1870年)、藩命により東京に遊学、尺振八せきしんぱちに英学、西周あまねに万国公法を学び、西洋近代思想の洗礼を受けます。自由のすばらしさに目覚め、人間は平等であるという思想を身につけてゆきます。

明治6年(1873年)10月に西郷隆盛

らが征韓論争に敗れて下野すると、八郎はその腰砕けの展開に憤激し、同郷同宿の3人の連名で左院(立法院)へ「征韓之議」を書き送ります。これが左院に提出されたのは翌明治7年(1874年)2月になりますが、その間、同年1月に高知の武市熊吉らが起こした岩倉具視暗殺未遂事件いわゆる喰違の変の嫌疑を受けて一時入獄されます。

同年2月、佐賀の乱が起きると、江藤新平を応援するため八郎は急遽帰熊しますが乱はわずか一日で平定されます。八郎はそのエネルギーを外に向けるかのように、同年4月台湾事変が起きると、50名の義勇兵を率いて台湾に出兵します。中国への渡航も企てますが、しかしマラリアにかかり、ほうほうのていで帰熊。荒尾の実家でくすぶっているとき、弟の伴蔵が東京からルソーの「民約論」を持ち帰りました。

五、父・宮崎政賢まさひかたの教え

初名は長兵衛のちに長蔵と改名。政賢51歳の時に明治元年(1868年)となります。熊本藩知事の改革により、戸長(現在の町村長)に任命され村の世話役となります。しかし、東京に遊学中の八郎が、生活のために父が小さな官職に付くことを嫌ってしきりに辞任を願ひ、政賢は戸長を辞します。

政賢は、情に厚く子女の教育に熱心で、家は文武道場のようにであり、窮民のため家政を顧みず私財を注ぐ事を惜しまなかったといわれます。三池藩内の干拓事業に引き込まれる形で関与し、近隣火災の後始末を背負い込むなどして晩年には宮崎家の家産は傾き困窮を極めました。「金納によって下層の武士となるよりも、上層の庶民であれ」という思想であり、末子の滔天が金銭を手に触れると「卑しいマネはするな」と厳しく叱り、また「豪傑

になれ、大将になれ」と日々言い聞かせていたといわれます。八郎の死から2年後の明治12年(1879年)10月、脳溢血で死去。享年62。

大柄で長刀の名手であった妻の佐喜もまた「男子が畳の上で死ぬのは何よりの恥辱」と子供たちに言い聞かせる武の家の気風でした。政賢の死後、佐喜は家財を質に出すなど苦勞して息子たちに学問を続けさせました。

六、宮崎兄弟と生家

宮崎家の祖は筑前三笠郡宮崎村の住人で後肥前国佐嘉に移り鍋島侯に仕えました。正保4年(1647年)正之が荒尾村に分家移住し荒尾宮崎の祖となります。子孫は代々細川藩に仕えて一領一疋の郷士の待遇を受けました。九代長兵衛政賢の時、ゆれ動く明治維新の中で宮崎家の四人の兄弟の行動は異彩を放ちます。

宮崎八郎（1851～1877年）次男

ルソーの「民約論」を經典とする植木学校を創設。西南の役が勃発すると民権家同士で熊本協同隊を結成し薩軍に合流。熊本県八代市萩原堤において27歳で戦死。

宮崎民蔵（1865～1928年）六男

貧農救済の立場から土地問題を志しました。欧米視察旅行後、荒尾村村長となり、翌年、土地復権同志会を組織し、「土地復権論」をもとに運動を進めました。孫文らとも心交があり、孫文の三民主義の中の「民生主義」における「平均地権」の考え方にも同趣旨の思想が生きていると言われます。辛亥革命後に中国に渡って革命の援助を行いました。滔天の良き理解者であり援助者でした。

宮崎彌蔵（1867～1896年）七男

養子にゆき、島津姓を名乗りました。明治20年（1887年）に中国への志を滔天に

吐露、滔天の目を中国問題に向けさせました。自ら中国人になり切ろうと横浜へ出て商館のボーイとなり、頭を辮髪べんぱつにして、中国革命とそれにもとづくアジアの解放をめざして活動をすすめていましたが、志半ば病に倒れました。

宮崎滔天とうてん（1870～1922年）八男

兄彌蔵の影響を受け、中国革命支援のため、献身的に活躍しました。孫文の日本滞在を可能にする一方、革命派の一方のリーダー、黄興や宋教仁らと孫文との画期的な同盟に尽力しました。

明治20年代に入ると、国内では自由民権運動が衰退し、強大な明治国家体制が確立します。一方、中国は当時、疲弊した専制王朝の清朝の支配下にあり、列強の侵略にさらされていましたが、中国の知識人たちは祖国の変革を模索し始めており、中国に革命が近づ



宮崎兄弟の生家・宮崎兄弟資料館入口



宮崎兄弟資料館（左）・宮崎兄弟の生家（右前方）

明治六年以来、政府政（まつりごと）を失し、奸吏位を竊（ぬす）み、賞罰は愛憎に出で、政令は姑息を究め、苟且偷安（こうしよとうあん）、一時しのぎ）、外国際の権利を失し、内末世の兆候を呈す、是れ人民の久しく痛憤切齒する所なり、此時に当り、政府は更に刺客を遣り、西郷陸軍大将を刺んとす、事由発覚、凶徒縛に就く、此に於て西郷大将朝廷に問ふことあり、則ち東上の専使を派す、時に鎮台は市中を焼毀し、県吏は罪人を解き、所在に放火せしむ、良民等周章狼狽為す所を知らず、是実に国賊にして天人共に容れざる所なり、我輩多年の宿志を遂ぐる此時に非ずして何ぞ、乃（すなわ）ち同心協力断然暴政府を覆し、内は千載不拔の国体を確立し、外は萬国対峙の権利を恢復し、全国人民と共に真成の幸福を保たんと欲す、是我輩の素志なり、我輩の義務なり。

宮崎八郎起草の「熊本協同隊挙兵の趣旨」（読みやすいように、カタカナ書きをひらがな書きにかえて記載しました。）



宮崎兄弟資料館の「宮崎八郎」コーナー。右下に宮崎八郎起草の「熊本協同隊挙兵の趣旨」が見えます。

く気運がありました。滔天と兄の彌蔵は、閉塞する日本を飛び出し、孫文らの新生中国運動に夢を託したのです。

宮崎兄弟の生家の説明板に、孫文が滔天と綴った筆談の書や、孫文が親しんだ庭にある梅の古木、泉水、味噌蔵、それに滔天がシャム（現タイ）から持ち帰った菩提樹等が当時の様子を偲ばせているとあります。

孫文は宮崎家を二度訪れました。一度目は日本へ亡命中の明治30年（1897年）の秋、滞在は十日に及びました。二度目は清朝を倒した辛亥革命一年余り後の大正2年（1913）3月。いったん掌中にした中華民国臨時大總統の地位を軍閥にむしり取られて日本への再びの亡命中でしたが、宮崎家の人々への感謝のために訪れました。

同敷地内にある宮崎兄弟資料館は、近代の

黎明期、激動の明治にあつて、近代日本の在り方に全身で立ち向かった宮崎四兄弟の生の軌跡を振り返ることができる資料館になっています。

（元九州職業能力発達大学教授）

【参考にした図書とサイト】

（1）山本博昭・著「近代を駆け抜けた男 宮崎八郎とその時代」、書肆侃侃房、

2014年9月発行

（2）宮崎八郎―ウィキペディア

（3）宮崎政賢―ウィキペディア

（4）くまもとLOOK・ふるさと寺子屋

「宮崎八郎とその時代」

（5）「孫文と共に世界を変えようとした宮崎

滔天」(imidasオピニオン)

能謡曲と俳句

― 身体で日本語の美しさを体験する



梶原 宣俊

一、はじめに―能謡曲との出会い

私は敗戦の翌年に生まれ、小学校時代から福岡板付米軍基地のラジオ放送を聞いていた。流暢な英語と音楽を聴きながら、アメリカに憧れ、中学高校と英語クラブに入り英会話を勉強した。日本語より英語が好きであった。米国留学に憧れたが家庭の事情で叶わず、大学に入ってからは、日本の近現代史や戦後思想文学に関心を持ち学んできた。

大学卒業後、広島YMCAという国際教育

団体に就職し、専門学校や日本語学校の経営と教育、国際交流に尽力してきた。海外十五か国に三十回以上訪問し、青少年の交流を体験してきた。夜の交流会で各国の若者たちが自国の文化芸能を披露してくれた。わが日本の若者は日本の歌を歌うくらいである。私は自分自身を含めて、若者たちが日本の伝統芸能文化を全く知らないという現実に愕然とした。ちょうどその時期、私は福山YMCAに転勤になった。これが大きな人生の転機となる。福山には全国でも珍しい能楽堂がある。そこで喜多流能楽師大島政允氏とその家族に出会い、謡曲を習い始めた。すでに五十二才になっていた。きっかけは福山県立歴史博物館十周年記念行事として開催された「音楽で綴る福山千年の歴史絵巻・瀬戸内の夜明け」組曲にナレーターとして出演したことである。これは大島先生の奥様である大島泰子さんの

企画であった。福山に転勤することがなかったら、私は能謡曲に出会うことも、日本の伝統芸能文化に関心をもつことも、日本語の美しさに感銘を受けることもなかったであろう。

毎月四回、仕事が終わって夜に自転車で能楽堂に通い続けた。漆黒の闇の中で大きな声を出しながら家に帰った。初めて出会う謡曲は六〇〇年の歴史の重みを感じさせる魅力的な日本語の美しさに満ちていた。謡曲の典拠となっているのは「平家物語」や「古今和歌集」「万葉集」をはじめ五十以上の文献にのぼる。中国の古典も三〇以上ある。謡曲は美しい日本の伝統的言語文化の宝庫である。その名文を、腹式呼吸によって大声で謡う。身体の中に五七五調のリズムが心地よく響きあう。謡は全部で二百曲以上あり、私は全部で百曲の稽古をさせていただいた。そして、異例の速さで教士免状をいただいた。六〇歳の時で

ある。

私は、多くの能を鑑賞し、謡を稽古し、能舞台で地謡も務めた。台湾でもアジア太平洋芸術学会で「黒塚」の地謡を務めた。

私はこのような能謡曲体験を通じて、次第に日本語の美しさと伝統的語り音楽に興味を持つようになった。団伊玖磨の「日本音楽史」を読み、お経・声明から始まる日本の豊かな語り音楽の魅力に取りつかれ、小唄・長唄・端唄・浪曲・浄瑠璃等、CDを買ってきて真似をした。

定年退職後、私は妻の故郷である鹿児島県出水市に定住することを決心し、謡曲教室を開いた。わずか三名であったが一生懸命指導した。鹿児島謡曲連合会及び出水市文化協会に入り、毎年秋の発表会に出演してきた。

二年後、大学教授をしていた高校時代の親友から東京の日本教育大学院大学の仕事の話

があり、私は初めて東京で三年間働いた。多忙な仕事の合間を縫って、私は毎週日曜日に浅草に通った。そして、浪曲、浄瑠璃、新内節を鑑賞し、習いに行った。目黒にある喜多流能楽堂にも月数回通い、東京在住の大島輝久氏に稽古をつけてもらった。東京は日本最大の現代都市でありながら、伝統文化芸能の宝庫である。江戸時代が生きており、私は日本の伝統芸能文化を堪能した。私は長年、教育の仕事をしてきたので、和文化教育大会でも発表し、その成果を「伝統文化教育論―日本の語り音楽の魅力」(B5六十一P)として小冊子を発行した。東京の三年間は私にとって人生後半の最大の充実した思い出である。

内容は以下のようなものである。

はじめに―なぜ伝統文化教育なのか

第一章 伝統文化と学校教育

・ 伝統的な言語文化の継承―能謡曲のすすめ

・ 日本の語り音楽の歴史と魅力

・ 学校教育への期待

第二章 日本の伝統と創造

・ 伝統と革新、不易と流行

・ 変わってはならないもの・伝統とは何か

・ 二度にわたる伝統断絶の歴史―アイデンティティの喪失

・ 日本の伝統文化

・ 着物の思想文化と武士道の思想

第三章 江戸の芸能文化

・ 能と謡曲

・ 世阿弥の「風姿花伝」における人生論

処世術

・ 歌舞伎、文楽、義太夫節、新内節、浪

花節

・口演 日本の語り音楽の魅力

第四章 能に学ぶ古典の世界

・大伴旅人論―権力闘争と亡妻挽歌

・小説「鞍のむろの木」

・俊寛論―鬼界島紀行

第五章 芸術とは何か・芸術文化立国論

おわりに―地域・学校を活性化する伝統文化教育とキャリア教育

二、俳句との出会い―能俳句の交流

そして二〇一九年の一月、思いがけなく俳句との出会いが始まった。

毎年一月に開かれる文化協会理事の新年

会で、新しく理事になられた白男川孝仁さんが偶然隣に座っておられたのである。初めてお会いし、お話していると「夕鶴俳句会」の主宰者で、俳句会に入りませんかとお誘いを受けた。私は俳句川柳短歌にも多少関心を持

っていたので二つ返事で入会することになった。同時に、能謡曲に関心があるので謡を教えてほしいとの要望があり、能謡曲と俳句の交流が始まった。それまで、能と俳句はあまり関係ないと思っていたが調べてみると、意外に深い関係があることを知り、驚いた。

俳句は、古代から奈良時代にかけて五・

七・五・七・七という短歌の定型が決まり中国の漢詩に対し「やまとの歌」「和歌」と呼ばれるようになった。平安から室町にかけて連歌、元禄時代には連句、発句と呼ばれ、明治時代に正岡子規によって「近代俳句」として確立されたものである。俳句は私にも身近な存在ではあったが、いざ作ってみると予想以上に難しい。私の句は実に平凡で通俗的なのである。わかりやすいだけである。

最初は自分の思いや考えを五七五にしただけのものである。わかりやすいけど面白く

もおかしくもない。私は真剣に俳句の勉強を始めた。

白男川さんに推敲していただきながら毎月一回の俳句会が楽しみで毎日、俳句に取り組み、日本語の感覚を磨きなおしている。特に淵脇護先生の毎回のコメントは的確で大変勉強になる。日本語には、漢字、ひらがな、カタカナがあり豊富な表現が可能である。俳句は、やり始めると四季の変化に敏感になり、日本語の魅力や美しさを再発見しつつある。季語は二千五百以上あり日本人の感性と歴史の宝庫である。

一年間の俳句体験を通じて、私の言語感覚の貧弱さ、鈍感さ、つまりは思考の貧弱さ、人間の浅薄さをいやというほど痛感させられた。それは、これまでの人生の生き方そのものを問われる辛い作業、過程であり続けている。

私はこれまで、書くことと話すことが好きで、高校以来詩や小説を日記に書いていたが、全く文才がなく結局評論や随想などを書いてきた。講演もかなり多くこなしてきた。モットーは「わかりやすさ」であった。難しいことをいかにわかりやすく書き話すかが私の関心事であった。

そしてわかりやすい「情報社会論」や「太宰治論」「吉本隆明論」「キャリア教育論」を書き出版してきた。

しかし、俳句はわかりやすさではない。論理ではない。評論ではなく詩である。私が最も苦手とする分野である。

白男川さんに推敲していただきながら毎月一回の俳句会が楽しみで毎日、俳句に取り組み、日本語の感覚を磨いている。

俳句は、やり始めると四季の変化に敏感になつてきた。これまで自然は好きで特に海が

好きであつたが、自然の移り変わりを漠然と感じていただけである。俳句を通して、日本語の魅力や難しさを再発見しつつある。季語は二千五百以上あり日本人の感性と歴史の宝庫である。謡曲と俳句には、日本の伝統文化と美しい日本語のリズムが息づいていることを改めて感じ始めた。謡曲と俳句は、ともに日本文化の深い味わいがあり、実に楽しい。

俳句の季語には日本の長い伝統文化、四季の豊かな感性が凝縮されており能謡曲の古文や歴史物語の世界と通底している

能謡曲もまた奈良時代に、中国から伝来した散楽が日本古来の芸能と融合し、猿楽として発展し十四世紀後半、観阿弥世阿弥によって夢幻能が完成する。

謡曲は月二回教えている。有名な「高砂」「羽衣」から始まり現在「鬼界島」と「船弁慶」を教えている。白男川さんは、郷土の歴

史にも関心があり、さらに意気投合している。私も「いずみ郷土研究会」に 六年前から入会し、研究誌に毎回発表してきた。特に、俊寛との出会いは劇的であつた。私は「鬼界島」(他流派では「俊寛」)に福山時代に出会い、その悲劇的物語と名曲に感銘を受けていた。鹿児島県出水市に住み着いて、東京から戻つた時、私は野田の感応禅寺の近くで偶然「俊寛僧都碑」を発見した。

なぜこんなところに碑があるのかと不思議に思い郷土史を調べていくと、何と阿久根、野田に俊寛が逃げてきてここで亡くなったという伝説と遺跡があることを知り、狂喜して調べ始めた。その成果は、「最期の俊寛伝説」として「郷土研究誌」に発表した。さらに、野田領主であつた島津忠兼公の生誕四五〇周年記念行事があり、私も実行委員として協力してきた。そして、悲運の名君である島津忠

兼公を偲び小謡を創作し、野田の若宮神社で毎年八月八日に行われる例大祭で披露してきた。白男川さんは、これに共感され、シテとワキのセリフを追加され、今年の例大祭にて二人で発表することになった。

謡曲と俳句には、ともに日本の伝統文化と美しい日本語のリズムが息づいている。俳句の季語には日本の長い伝統文化、四季の豊かな感性が凝縮されており、能謡曲の古文や歴史物語の世界と通底している。

能謡曲の原典は八十以上に上る。さらに中国の文献は二十以上ある。万葉集はじめ古今和歌集、平家物語等実に多様である。能謡曲を学ぶということは、日本や中国の古典をまなぶことである。宝生流教授である門脇達祐氏の「謡曲基歌集」（平成十四年）に詳しく述べられている。貴重な労作である。

さらに調べていくと、俳句の巨匠たちが能

謡曲に関心を持ち俳句も作っていることが分かり狂喜した。正岡子規や高浜虚子、夏目漱石は、能謡曲をたしなみ共に交流している。

そして、能謡曲に深く関心を持ち俳句にも作っていることが分かってきた。私は驚くと同時に嬉しくなり、能謡曲と俳句の関連を調べていった。

まず高浜虚子である。俳句を始めて、私は分厚い歳時記を買い求め、季語の勉強をしてきた。私は、たまたま高浜虚子の孫である稲畑汀子の「大きな活字のホトトギス新歳時記」（一九九一年三省堂九四九p）を愛用してきた。これは虚子が編集した歳時記に基づき改訂したものである。

この歳時記は字も大きく、季語の数も多く、わかりやすい説明と多くの先人たちの名句がたくさん掲載されている。私は、その中でもこれはいいなと思う句が高浜虚子の句である

ことが多いことに不思議な縁を感じていた。

私は根が単純で、浅学菲才であるから、あまり難しい技巧を凝らした俳句は苦手で全く理解できないのである。その点、虚子の句は私にはとても分かりやすく感じた。「花鳥諷詠」

「客観写生」を主張してきたせいであろうか。

三、能と俳句の共通性と関連性―高浜虚子に学ぶ

さて高浜虚子は、生涯に二十万句を超える俳句を詠んだといわれている俳句の巨匠であるが、能もまた、プロの能楽師なみの実力を有していた。

謡曲だけでなく、鼓や笛もこなし、仕舞やシテワキを演じ、新作能まで作っている。私など謡曲だけで、足元にも及ばない。

三村昌義の「虚子能楽関係年譜」に基づき、虚子の能と俳句の歴史を簡単に要約してみる。

高浜虚子は、一八七四年（明治七年）愛媛

県松山市の旧松山藩士池内政忠の五男として生まれた。虚子の家柄は、旧幕時代伊予松山藩の演能に深くかわり祖父は宝生流を習い、父は松山での演能の世話役を引き継ぎ、能楽に造詣が深く、明治維新後の松山の能楽は虚子の父が世話していたという。兄の池内信嘉は宝生流から喜多流に転じ、明治三十五年に上京し、雑誌「能楽」を発行し維新後衰退していた能楽の復興に尽くした。虚子もまた幼児から能に親しみ、自ら能を舞い、大小の鼓を打ち、新作能まで創っている。

九才で祖母の実家の高浜家を継ぎ、一八八八年明治二年伊予尋常中学校（現松山東高校）に入学する。一歳年上の河東碧梧桐と同級になり、彼を介して正岡子規に俳句を教わる。明治二四年、子規に「虚子」の号を授かる。明治二七年、二〇歳の時、下宝生流家元に碧梧桐とともに謡を習う。

明治二八年、松山で漱石と出会う。

明治三〇年「ほととぎす」創刊

明治三五年 二八才 子規庵や虚子宅で

謡会を催す。「能楽」に「謡

曲羽衣」を掲載。

明治三六年、宝生会で「鞍馬天狗」のワキ

をつとめる。

明治三七年 三十歳「能楽」誌上に「第一

回謡曲放談会」掲載

以後

明治三九年 三十二才 漱石を能に招待、

謡を進める。

明治四十年〜四十二年 三十三才〜三十

五才 漱石を訪ね、謡をうた

う。

大正二年 三八才 健康を損ねいよいよ

よ能に親しむ、喜多六平太の

「巴」を賞賛

大正三年 三十九才 鎌倉能舞台完成

大正八年 四十三才 新作能「実朝」発表

昭和三十四年 八十四才 皇太子成婚祝

賀曲として舞囃子「花一時に開

く」を作詞 四月八日永眠

(三村 昌義「虚子能楽関係年表」から要約)

以上が高浜虚子の能の歩みの要約である

が、プロの能楽師以上に造詣が深く、「能楽」

雑誌に発表された文章は、優れた能楽評論に

なっている。私は謡曲だけが、虚子は仕舞

から能のシテワキの役を演じ、新作能まで創

作している。その才能の豊かさに驚かされる。

宝井其角は「謡は俳諧の源氏」と書いている。

私は、高浜虚子に出会うことにより、俳句

だけでなく、能の理解もまだまだ不十分である

ことを痛感させられた。いわんや俳句おや

以上の反省を踏まえながら、能をベースにした俳句を調べてみた。予想以上に多くの俳句が作られていた。子規が約七〇句、漱石が約七〇句、虚子はその何倍もの句を作っているが数は現在不明である。

ここでは有名な句をいくつか紹介してみたい。

江戸期先駆作家

・おもしろうて やがて悲しき 鵜舟哉

(芭蕉)

・朝風の 吹きさましたる 鵜河哉(蕪村)

正岡子規

・寒月や 人去るあとの 能舞台

・松風や 謡半ばや 春の雨

・あつらえの 扇出来たり 謡初

・草の家の 隣に遠く 謡初

・謡ヲ談ジ 俳句ヲ談ス 新茶哉

高浜虚子

・鼓あぶる 夏の火桶や ほととぎす

・鏡板に 秋の出水の あとありぬ

・能すみし 面の衰へ 暮の秋

・一面に 月の江口の 舞台かな

・夏潮の 今退く平家 亡ぶ時も

河東碧梧桐

・神事近き 作り舞台や 楠若葉

・曲すみし 笛の余韻や 春の月

・両肩の 富士と浅間や 二日灸

・薪能 小面映ゆる 片明かり

・舞殿や 薫風昼の 楽起こる

夏目漱石(熊本時代)

・白雲や 山又山を 這い回り

・憂ひあらば 此の酒に酔へ 菊の主

・弁慶に 五条の月の 寒さ哉

・落ち延びて 只一騎なり 萩の原

・梅散るや 源太の箆 はなやかに

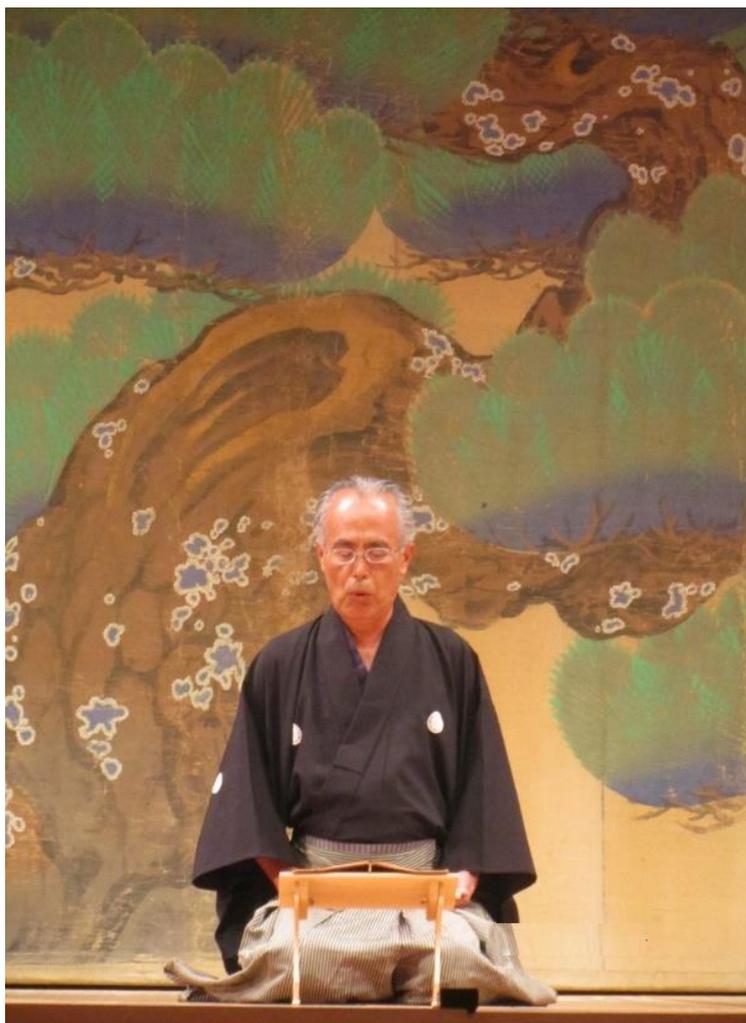
四、おわりに―世界詩としての能と俳句

二〇一八年、青山学院大学英米文学科同窓会創立二〇周年の記念講演で、福岡出身の詩人高橋睦郎が「世界詩としての能と俳句」と題して講演をしている。

高橋は「ヨーロッパの教養人に説明なしに理解される日本の伝統芸術が二つある。一つは俳句で、もう一つは能。パリを拠点に国際的に活躍している韓国人画家の言葉だ。俳句はエズラ・パウンドを通して二〇世紀の世界詩を大きく変えたといわれる。能は二十一世紀の世界演劇を変えうるか。変えうるとしたらどう変えうるのか」と述べている。

以上のように、能と俳句は歴史的にも内容的にも深い関係にあることが分かってきた。俳句は現在、大変なブームで多くの方々が俳句を学んでおられる。テレビのプレバトも人氣があり、多くの有名人が出演している。

しかし、能謡曲は、極めて少数である。理由はいくつか挙げられる。プロの能楽師が少ないこと、大都市に集中しており地方都市は一部を除いて皆無に近い。さらに謡を指導する教士、教授の数が極めて少ない。私は現在謡曲を習っておられる方に教士の免状を取り多くの方々に指導していただきたいと願っている。日本能楽協会も、もっと能謡曲を普及するためにより安価な免状取得システムを考えて頂きたいと思っている。俳句のようにもつとだれでも気楽に始められるよう、尽力していただきたいと願っている。能謡曲は、指導者が少なく、とてもカネと時間がかかるのがネックである。私も少ない給料から費用を捻出するのに苦労した。提案としては、謡教士の下に謡見習いのような資格を新設し、誰でも気軽に安い値段で謡を学べるようにしたらどうだろうか。日本能楽協会でも検討してもら



2019年出水市文化祭で「田村」「鬼界島」発表

えれば幸いである。そうすれば能謡曲のファンの層が広がり、能の鑑賞者も増えるだろう。国としても、もっと伝統文化芸能に多くの人々が気軽に安価に参加できるように資金援助をしていただきたいと思う。それが、より豊かな日本人の文化を継承していくことにつながるのではなからうか。俳句人口なみに能謡曲人口が増えれば、より豊かな精神文化生活を送れるようになるだろう。

かくして、小中高とアメリカにあこがれ、英語が好きだった私が、YMCAでの多くの国々との国際交流体験を通じて、五十代になってようやく日本の歴史、伝統芸能文化「能謡曲」に目覚め、その過程で、日本の伝統芸能文化、とりわけ語り音楽の奥深さを味わい、今俳句の奥深さを知り、日本人に生まれたことを心から幸せと感じている。現在七十三歳、これからいつまで生きれるかわからないが、

死ぬまで謡曲と俳句を続けていきたいと願っている。

(出水市文化協会理事、喜多流謡教士)

《参考文献》

- ・「改版謡曲基歌集」門脇達祐 平成一四年高山プレスシステムセンター
- ・三村 昌義「虚子能楽関係年表」
- ・稲畑汀子「大きな活字のホトトギス新歳時記」(一九九一年三省堂九九九p)
- ・木佐貫 洋「芭蕉、蕪村、子規の俳句と能」総合文化研究第一号「子規の俳句と能」日本大学大学院総合社会情報研究科紀要二〇〇二



恩師列伝 ― 七人の侍



梶原 宣俊

はじめに

今年で七十四歳になる。生涯現役をめざしてがんばっているがどうしても過去の人生を振り返ることが多い。人生を振り返ってみると多くの人々に出会い、多くの影響を受け、今日まで比較的恵まれた幸せな人生だったとつくづく思う。そのなかでも特に大きな影響を受けた七人の恩師を振り返ってみよう。

一、小学時代 木村磯生先生 ― 「読む書く話す」が好きになる

私は、父親の仕事の関係で、小学校を四回転校している。福岡で三回、長崎で一回であ

る。小学最後の六年生の担任が木村磯生先生であった。

赤ら顔の恰幅のいい先生で、とても優しくかつ厳しく、私は初めて恩師と呼べる先生に出会った。その影響は極めて大きく私のその後の人生が決まったように思う。

まず、級長と図書館係をやるように言われた。毎朝、朝礼の司会をやらされた。図書館係は、毎日放課後司書のような仕事をさせられた。利用者は少なかったのですが、私は図書館の本を読み漁った。世界日本の偉人伝や、シヤロックホームズを読んでいた。読書の面白さを初めて知った。それまで漫画ばかりを読んでいたのだが、本に変わった。以後生涯読書好きになった。

ある日、先生が、明日は宿直なので、親の了解を得て、夜遊びに来てもいいよと言われた。私はすぐに手を挙げて、友人たちと泊ま

りに行った。職員室のストーブの上で、アサリを焼きながら食事をした。夜は宿直室で雑魚寝である。夏休み、先生が数人で家に遊びに来ていいよと言われた。私は早速、仲の良い友達と四人と自転車で、隣村に住んでおられた先生の自宅へ遊びに行った。

大きな農家で、先生はよく来たねと喜ばれ、「よし、みんなに鶏肉のすき焼きを創ってやる」と言って、鶏小屋にいき一羽の首を絞められた。私は、初めて見る残酷な光景に驚いた。さらに羽根をむしりとらされ、なんと残酷な先生かと驚いた。しかし、そのすき焼きは最高においしかった。

秋になると文化祭があり、うちのクラスは演劇をやるからと言われた。「運命の鐘」という劇で内容は忘れたが、私は主人公の少年役をやり、先生は老人役を演じられた。最後の場面で、老人と少年が語り合うところで、先

生は涙を流しながら演じられた。私はその場面が生涯忘れられない。私は演劇という芝居で本当に涙が流せることを初めて知ったのである。

卒業式で、先生は一人に一人にふさわしい言葉を添えて絵入りの色紙を送られた。私には、「強く美しく」と書いたあざみの絵が贈られた。私はひ弱で青白き少年であった。これは生涯の目標となった。大学生の時、先生の早逝を知り、私は葬式にかけた。あのすき焼きを食べた座敷の位牌に手を合わせると涙があふれて止まらなかった。

木村先生は、人生の恩師で、その後の私の人生に大きな影響を与えることになったと思う。先生は宮沢賢治の詩が好きであった。私は、この先生のおかげで「読む・書く・話す」ことが好きになり、生涯続けることになった。今から考えれば、敗戦後の日本の小さな片田

舎にこのような素晴らしい教育者がいたことを私は幸運に思う。

二、中学時代 坂本先生 — 英語が好きになる

残念ながら中学時代には恩師と呼べるほどの先生に出会うことはなかった。中学から戦後の受験ブームが始まっていた。私は、英国土社という3科目が好きで、理数は苦手であった。

あまり受験勉強をした記憶はないが、田舎の小さな中学であったからいつも一番であった。このころから中間、定期試験の結果を貼り出すことが始まった。これが私にとっては良くない影響を与えたと思う。大して努力しなくてもいつも一番なのである。

特に英語が好きで、英語クラブにはいり英会話の勉強をした。坂本先生が担当で発音もよかった。私は小六から米軍板付基地の放送

を聞いていたので発音には慣れていた。一番病になり、小山の大將病になった。「井の中の蛙大海を知らず」である。

三、高校時代 吉永先生 — 英語劇と太宰にはまる

一番近くにある福岡県立高校に入学した。最初にあつた実力試験で一氣に一二〇番になった。この高校は九州大学の予備校みたいな学校で、修猷館高校と九大の入学者数を競い合っていた。授業内容が九大の入試問題で、私は受験教育に猛烈に反発するようになった。私は、秋の弁論大会で、教育基本法を取り上げ、現実の受験教育を痛烈に批判した。しかし、教員や学生からは何の反応もなかった。私はESSに入り、実践的な英会話力に力を入れた。その担当の先生が吉永先生である。夜間の教員であった。大学を卒業したばかりの若い先生で、発音もよく何より受験英語か

ら自由であった。

私たちESSは、日曜日には板付基地の家庭を訪問して子供たちをつかまえて実践的な英会話を学び、中州の映画館に行き二回同じ映画を鑑賞した。一回目は映画を楽しみ、二回目はできるだけ字幕を読まずに鑑賞した。

秋の文化祭では、英語劇を披露した。私はちょうど部長に選ばれ、シエークスピアの「ベニスの商人」と「ハムレット」をやることを提案し、認められた。私は厚かましくも、演出と主役をやらせてもらった。この体験は、高校三年間の最大の思い出であり、部員の結束も固く、未だに同窓会が続いている。わたしにとっても、高校最大の思い出であり、充実した青春であった。

クラブで遅く帰り、田んぼのあぜ道を歩いて帰りながら私は初めて、生きているという充実感を実感していた。夕焼けが美しく輝い

ていた。

英語好きが高まり、私は本気で米国留学を考え始めた。当時、ESSの先輩が二人、AFSで米国留学をしていた。私は親にその希望を伝えた。しかし、猛烈に反対され、私は泣く泣く留学をあきらめた。しかし、その時から私の初めての反抗が始まった。私は何も悪いことを望んだわけではない。親が私の人生の敵として変貌した。私はそれから徹底的に親に反抗し、家族という保守の牙城を呪い始めた。ちょうどその時期に、図書館で太宰治の「人間失格」に出会った。太宰の繊細な感性と「家庭の幸福は諸悪の元」という言葉に共感した。それから太宰ファンになりすべでの著作を読み漁った。

四、大学時代 岩永久次先生 — セツルメントと太宰論

やがて私は、大学進学の時期になり、親が

地元の大学の理工系を薦めたが、断固として反対し、熊本大学法文学部に進学した。来ななくていいと言うのに、母親がついてきた。私は、母を駅まで送り、下宿に帰り、万歳を叫んだ。夏休み等も帰省することはなかった。ついに百パーセントの自由を手に入れ、自由を満喫した。

しかし、大学の講義は、まったく面白くない。前期までではじめに通学したが、行くのをやめた。毎日全くの自由で、何かクラブにでも入ろうと思ひ、熊本学生セツルメントクラブ連合に入った。このクラブは熊本市内のすべての短大大学が参加するクラブであった。しかも、大学で学んだ知識技術を地域で生かすという奉仕活動クラブであった。私は入会し、水俣の石飛という開拓部落に夏休み定住し、地域の子供たちや母親たちに勉強や知識、医薬品等を提供した。大変遣り甲斐のあるク

ラブで、この出会いがその後の私の人生に決定的影響を与えることになろうとは夢にも思わなかった。

まず、岩永久次先生との出会いである。熊本商科大学の地域社会学の先生で、本来なら出会うことのなかった先生である。私はクラブ連合の会長になり、研修会を企画した。講師として岩永先生の紹介を受けてお招きした。先生の講演は、大学の授業とは比較にならないほど心のこもった、天草の漁村等のフィールドワークに基づく実践的な話であった。講演後、私は、お礼とともに少し話をさせていただいた。先生が、よかつたら自宅に遊びにおいでと名刺をいただいた。私は、この先生の温かい人柄と実践的内容に惚れこみ、すぐに遊びに行った。

先生はよくきたねと喜ばれ、焼酎を飲みながら長時間歓談した。その後、何回も訪問し

た。ある夜、私は酒に酔い、高校時代から心酔してきた太宰治について思いを語り始めた。すると、突然先生が真顔になり、「梶原、ぐずぐず言わずに、太宰治論でも書いてもってこい」と言われた。

私は、泣きながら自転車で帰り、「よし、書いてやるぞ」と心に決めた。それまで、自分が太宰論を書くなど夢にも思っていなかったが、決心して書き始めた。幸い太宰全集は全部読んでおり、好きな文章はノートにとっていた。

数か月後、徹夜も数回やり、百四十枚の「太宰治論」を完成し、私は喜んで先生宅を訪ねた。先生は、本当に書いてくるとは思っておられなかったのか、驚いて「おう、本当に書いてきたか、よし、今日はお祝いだ」論文を神棚に上げられて「今日はお祝いだからとこんと飲もう」と二人で夜遅くまで痛飲した。

セツルメントクラブとの出会いは、もうひとつの出会いを生み、現在の妻と出会い結婚することになる。

大学四年のとき、全国で大学紛争が巻き起こり、バリケード封鎖で大学が休校になった。私は、これはチャンスだと思い、休学届を出して、親友とともに憧れの東京に出た。

日雇い労働やキャバレーのチラシ配り、塾の講師などのアルバイトで何とか食いつないでいた。生まれて初めて、生きること、食うことの大変さを痛感した。涙ながらに食事した。小学校以来、演劇に関心をもっていたので「歴史座」という小さな劇団の研修生として半年訓練を受けた。しかし、自分の才能なさに気づき、演劇の道はあきらめた。

さらに私は、大学三年の時、熊本の古本屋で、たまたま吉本隆明の「異端と正系」を読み、彼が敗戦体験にこだわり戦後を真摯に生

きてきたことを知り、吉本の本を買いあさり、ファンになっていった。私は、ぜひお会いしたいと思ひ、恐る恐る電話した。吉本は気さくに応対してくれて遊びにおいでと言われすぐに自宅を訪ねた。私は太宰論を持参していた。後日、吉本さんから電話があり、いい作品ですから「試行」に掲載してあげますと言われて私は小躍りした。この論文は、連載終了後しばらくたってから二〇〇三年初めて自費出版した。二〇〇四年には「吉本隆明論」も出版した。太宰も吉本も、人生最大の恩師となつたが、恐れ多いのでこの列伝からは割愛した。

一年後、復学した私は、まじめに授業を受け、卒業論文を書いて翌年卒業した。驚いたことは、同級生たちは皆、一年間授業も受けず卒業も書かずに全員卒業していた。私は、政府国家権力の本質を垣間見た気がした。

五、社会人時代 川喜田二郎先生 — KJ法移動大学運動との出会い

私は卒業後、どこに就職するかいろいろ迷った。好きな「読み書く話す」ことが生かせる職業はないかと探し、新聞記者に応募した。読売新聞西部本社に就職が決まり、私は、小倉で新入社員研修を受けていた。

その時に、突然高校時代の親友から電話があつた。彼とはいっしょに休学して東京に出て復学した仲である。彼は東京時代に、川喜田先生に出会い、KJ法と移動大学運動に熱中していた。私も話を聞き関心を持っていた。

彼は広島大学に復学し大学院に進学していた。内容は広島島の宮島で移動大学を開催することが決まったが、プロジェクトリーダーをやつてくれないかという依頼であつた。私は、前年に彼の誘いを受けて、沖繩移動大学に参加していた。川喜田先生にも会っていた。野

武士のような風格を有しとても大学の先生とは思えなかった。友人は一週間で返事をしてほしいと電話であった。それから私は一週間悩んだ。せっかく苦勞して新聞社に入社したが、それほど新聞記者にあこがれていたわけではない。親友の薦めるKJ法移動大学運動は、大学改革運動であり、新しい時代社会を創造するチャレンジである。私も現状の大学には大きな不満をもってきた。私のヤクザな血が騒いだ。一週間悩んで、私は、新しい時代に賭けた。辞表を提出し、小倉から列車に乗り込んだ。広島に着き、友人の家に寝泊まりしながら、新しい仕事について議論した。

まず移動大学広島本部の事務局作りから始まった。広島YMCAという大きな組織が全面的に協力支援してくれた。そのトップが後半の人生を左右することになる相原和光総主事であった。

川喜田二郎先生と相原先生が私の成人期の大恩師となった。私はまず、KJ法に関心を持つ人々に声をかけ「広島KJ法研究会」を立ち上げ、移動大学の運営母体にした。この会は、広島県市の意欲的な職員や大中小企業の経営者、広島家庭裁判所の調査官、広大生等20人余が集まり、広島移動大学開催に向けて精力的に活動を始めた。相原先生が会長と大学のキャンパスリーダーを快く引き受けてくださり、本部事務局も無料で提供してくれた。かくして、第十一回広島移動大学は宮島をキャンパスにして盛大に開催され、成功裡に終了した。

六、YMCAとの出会い・相原和光先生

翌年の春、相原先生から私と親友にYMC Aで働かないかというお誘いがあり、移動大学終了後の予定はなかったから二つ返事で就職した。すでに深い信頼関係、人間関係がで

きあがっていた。

川喜田先生と相原先生も、肝胆相照らすという大人物の風格を有していた。

川喜田先生とはその後亡くなられるまで親しく指導していただいた。時々東京出張のうちに自宅を訪ねた。後年私は、情報化社会のツールとしてのKJ法をテーマに広島でKJ法学会を主宰した。先生とは亡くなられるまで、親しくさせていただいた。

広島YMCAでの仕事は実にチャレンジングであった。私に向いた仕事が次々と与えられた。

まず、最初は、研修センターの経営であった。広島市から二時間山奥に行ったところに、広島では唯一の温泉地があった。湯の山・湯来温泉である。

その近くにあった小学校が閉校になり、広島YMCAが買い取り、青少年向け宿泊野外

活動センターとして使用していた。夏だけの開業で、地元の方独りだけが管理人として働いておられた。相原総事に、ここを年中使用される研修施設として発展させて赤字を解消してほしいと言われた。

私は早速、広島市内から湯来町に移住した。学生時代のセツルメント運動以来、定住定着は私の信念であった。私は地域の人々と交流しながら、発展計画を作成した。それは、子供から大人までの生涯学習センター構想であった。幸い、KJ法は、移動大学運動とともに、社会の注目を浴び、全国的に有名になりつつあった。その機会をとらえて、私は企業をターゲットにして新入社員から管理職までの研修企画やセミナーを企業や団体に売り込んでいった。利用客はうなぎのぼりに増加し、利用者が激増した。ちょうど日本は高度経済成長期に突入していた。5年後には、古い校

舎を壊し、近代的なヨーロッパ風の研修センターに生まれ変わった。

次に事業部で、総合開発研究所を立ち上げ、21世紀を科学する情報誌「ザウエイブ」を年6回発行し続けた。時代は高度情報化に向かって大きく変化していた。私は、現在のネットカフェの前進である「情報喫茶アスキス」をオープンさせた。出版社からの依頼で初めて本を書き出版した。

数年後、私は専門学校を担当することになった。専修学校制度ができて間もなくのころである。私は学生募集に力を入れながら教育内容と教育方法の研究に尽力した。時代の変化の中で、実践的職業教育機関として、全国的にブームが起きた。順調に生徒数が増え、2冊目の本「専門学校教育論」を書き出版した。同時に日本語学校も担当するようになり、英国、中国に姉妹校を作りたびたび相互訪問

を行い交流を深めた。

この間、相原総主事と林辰也副総主事にかわいがっていたとき、私は存分に自分の持つ力以上の実績を残すことができた。

この間、相原先生には、特に可愛がっていたとき、公私ともに親しくさせていただいた。最初のころは、お抱え運転手のように車であちこちに行き、車の中で、先生の人生、生き様ご苦労をたっふりと聞かせていただいた。

大人の風格を持っておられた先生の生涯は戦争を挟んで実にドラマチックであった。私は、先生の太っ腹、キリスト教信仰の深さ、柔軟性、行動力等多くを学ぶことができた。

今回、これを書くにあたって、改めて先生唯一の書「生かされて生きる」(1992年日本YMCA同盟出版部)を読み直した。三十年の温かいご指導を思い出しながら、涙がでてきた。先生の生涯は実にドラマチックで、不

遇の子供時代を経て、戦争で満州に行き、捕虜となりソ連に抑留されたつらい経験等、涙と驚きの連続であった。戦後日本に帰国されてからは、日本YMCA同盟に奉職され、その後広島YMCAの総主事として赴任された。貧しく小さなYMCAを十年余で見事に再建発展させられた。私が入職した時期は、第一次発展が終了し第二次の発展期であった。私は、先生のおかげで実に充実したやりがいのある仕事を経験することができた。

私が学んだことは、物事に動じない太っ腹の根性と、信仰の深さ、謙虚さ、平和への信念、行動力等数えきれない。私のような無力でひ弱な人間が、無事に充実した職業生活を送れたのは、ひとえに相原先生とYMCAというユニークな組織のおかげである。相原先生は二〇〇六年天国に召されたが、私はその直前までご指導を受けた。

七、福山YMCA 喜多流能楽師大島政允先生 — 能謡曲との出会い

一九九八年、私は初めて転勤を命じられた。最大のブランチである福山YMCAであった。福山YMCAはすでに駅前の一等地に五階建てのビルを有し、活発に事業活動を展開していたが、ここ数年足踏み状態であった。

私は、衰退していた予備校事業を閉鎖し、高齢化社会に向けてデイーサービスセンターをオープンさせ、いわゆるスクラップアンドビルドを行い財政の安定化をめざした。同時に、地域に密着するため、さまざまな地域活動に尽力した。その過程で出会ったのが、喜多流能楽師大島政允先生ご一家である。

これが大きな人生の転機となる。福山には全国でも珍しい能楽堂がある。そこで喜多流能楽師大島政允氏とその家族に出会い、謡曲を習い始めた。すでに五十二才になっていた。

きっかけは福山県立歴史博物館十周年記念行事として開催された「音楽で綴る福山千年の歴史絵巻・瀬戸内の夜明け」組曲にナレーターとして出演したことである。これは大島先生の奥様である大島泰子さんの企画であった。福山に転勤することがなかったら、私は能謡曲に出会うことも、日本の伝統芸能文化に関心をもつことも、日本語の美しさに感銘を受けることもなかったであろう。

毎月四回、仕事が終わって夜に自転車で能楽堂に通い続けた。漆黒の闇の中で大きな声を出しながら家に帰った。初めて出会う謡曲は六〇〇年の歴史の重みを感じさせる魅力的な日本語の美しさに満ちていた。謡曲の典拠となっているのは「平家物語」や「古今和歌集」「万葉集」をはじめ五十以上の文献にのぼる。中国の古典も三〇以上ある。謡曲は美しい日本の伝統的言語文化の宝庫である。その

名文を、腹式呼吸によって大声で謡う。身体の中に五七五調のリズムが心地よく響きあう。謡は全部で二百曲以上あり、私は全部で百曲の稽古をさせていただいた。先生にはいつも優しくご指導していただき、奥様や三人の娘さん、後継者の大島輝久さんにも親しくさせていただいた。個人的にも食事に行ったりした。そして、異例の速さで教士免状をいただくことになった。六〇歳の時である。

私は、多くの能を鑑賞し、謡を稽古し、能舞台で地謡も務めた。台湾でもアジア太平洋芸術学会で「黒塚」の地謡を務めた。

私はこのような能謡曲体験を通じて、次第に日本語の美しさと伝統的語り音楽に興味を持つようになった。団伊玖磨の「日本音楽史」を読み、お経・声明から始まる日本の豊かな語り音楽の魅力に取りつかれ、小唄・長唄・端唄・浪曲・浄瑠璃等、CDを買ってきて真

似をした。私は、YMCAという国際教育団体で働いてきたから、海外には十五カ国以上訪問したが、日本の伝統文化芸能には全く無知であった。能謡曲に出会って、私は初めて日本人になったような気がする。

定年退職後、私は妻の故郷である鹿児島県出水市に定住することを決心し、謡曲教室を開いた。わずか三名であったが一生懸命指導した。鹿児島謡曲連合会及び出水市文化協会に入り、毎年秋の発表会に出演してきた。

二年後、大学教授をしていた高校時代の親友から東京の日本教育大学院大学の仕事の話があり、私は初めて東京で三年間働いた。多忙な仕事の合間を縫って、私は毎週日曜日に浅草に通った。そして、浪曲、浄瑠璃、新内節を鑑賞し、習いに行った。目黒にある喜多流能楽堂にも月数回通い、東京在住の大島輝久氏に稽古をつけてもらった。東京は日本最

大の現代都市でありながら、伝統文化芸能の宝庫である。江戸時代が生きており、私は日本の伝統芸能文化を堪能した。私は長年、教育の仕事をしてきたので、和文化教育大会でも発表し、その成果を「伝統文化教育論―日本の語り音楽の魅力」(二〇一一年B5六十一P)として小冊子を発行した。東京の三年間は私にとって人生後半の最大の充実した思い出である。

おわりに

七十有余年生きてきて、改めて、出会いと恩師の偉大さを再認識した。本当は、私の精神に決定的影響を与えた太宰治と吉本隆明の二人も大恩師に加えるべきだが、恐れ多くて割愛した。二人については、「太宰治論―選ばれしものの悲哀とリリズム」(二〇〇三年文芸社)「吉本隆明論―戦争体験の思想」(二〇〇四年新風舎)として出版しているので。参

考にしていただければ幸いである。森信三先生は、生涯のうちで、人は必要な人と遅くもなく早くもなくちょうどいい時に出会おうと言っておられる。こうやって七人の恩師を振り返ってみると、まったくそのとおりだなと感じ銘を新たにする。七人の侍と副題を付けたのは、これらの恩師は皆、日本人としての誇りと愛情と気概を持った武士のような風格を備えていたからである。私も大きな影響を受けて、精一杯努力してきたつもりだが、私を恩師と思ってくれる人が何人いるだろうか。はなはだ心もとない。

二〇一九年の正月、出水市文化協会の新年会で、「夕鶴俳句会」の白男川孝仁氏に出会い、遅まきながら俳句を学び始めた。その出会いについては「能謡曲と俳句」に詳しく書いた。

この俳句会で出会った、「河鹿」主宰の淵脇護先生は、元教師で、毎回適切なコメント

をいただき、人生最後の八人目の恩師になりそうな予感がしている。

私の印象を、初めて「博覧強記」と評していただき、喜んでいたが、よく調べてみると、頭でっかちという意味もある。出会ったばかりなのに、鋭い指摘だと感服した。私の俳句は、確かに頭でっかちなのである。

これから先生にしつかり師事して、少しでも感性を磨き、俳句の腕を磨きたいと願っている。

（出水市文化協会理事、喜多流謡教士）



生き方の研究から 店仕舞いの研究へ



中西 喜彦

一、最近の心境

八十三歳の誕生日を過ぎ、二月以来の新型コロナウイルス騒動と六月からの長雨にすっかり行動が制約されている。ついつい来し方行く末を考える。男性の平均寿命が81歳になったと聞くが、5月、7月と学部は違えども大学1年の時から今までお付き合いのあった友人が亡くなった。同じ学部で大学、大学院、就職した大学も同じ大学のM君も一昨年亡くなった。確かに平均寿命とは言いえて妙だ。人の評価は棺をおおって後定まると言う

が皆さん立派な人生を送られたと交流を振り返ると本誌投稿の筆が進まない。

所が6月中旬YouTubeに三峡ダムが危ないとの報道が出た。下流の武漢、南京、上海が水浸しになりそうだという。既に上流の重慶はかなり水浸しになっているところがあるという。その時、寒気(さむけ)のような不思議な感覚を味わった。新型コロナウイルスで苦勞した武漢の人達はどうなっているのだろうと思う。1931年の長江大洪水では約400万人が死亡したといわれている。

それ以来気になって気になって、毎日YouTubeと睨めっこして、三峡ダムの水位を調べている。これまた筆が進まない。マスク一つとっても中国に8割も依存していた現状をみると、中国の病害、水害、さらに蝗害の日本に及ぼす影響は想像を絶する。

最近の動画を見ていると自動車や家がぶか

ぶか浮かんで流れてゆく。これでは歴史の継
続性など夢のまた夢。ガラガラポンで一から
出直すと、被害が一段落後、新しい王朝が出
来るのだろうか。岡田英弘博士の言われる「盗
賊団中国共産党王朝」の命運も70年で先が
見えてきた。

一方、米国も11月の大統領選挙を巡って
トランプ氏対バイデン氏の最後の戦いが繰り
広げられている。藤井厳喜氏の解説によると
米国の白人層の中には宗教の自由を求めて、
英国から米国に渡ってきた層と、ユダヤ系金
融資本のロックフェラーやロスチャイルド家
を中心に国際金融連合と言われる層の2集団
があるという。それに、黒人層、メキシコ人、
アジア人が加わる。既に第二次大戦開戦時の
ルーズベルト大統領から国際金融連合が差配
する大統領に変わっているという。

米国ファーストと連呼するトランプ大統領

をみると少し奇異に感じるが、この75年間
米国では、日本を抑え、ソ連を助け、中国を
助け、米国の産業のかなりの部分を中国など
に移すなど、グローバルな対応で国際金融連
合は儲けてきた。実は米国人も農業や工業を
始め生産業で職を奪われていたのである。前
者の代表が民主党バイデン氏、後者が共和党
のトランプ氏というわけである。

所詮我が国も米中の狭間の中で生きて行く
わけである。表題の生き方の研究から、店じ
まいの研究を考えたが三峡ダムが決壊を考え
ると馬鹿馬鹿しくなった。どんなに死に方を
工夫しても5分先に浸かれば確実に死ぬ。人
生いつ死ぬか分からぬ恐怖に怯えるより最後
まで生きる努力が大切だと思った。

二、米国と中国での所感

米国に行つて驚くのは歴史のない国という
ことである。52歳の時ウイスコニン州立

大学マジソン校に5ヶ月ほど国外研修が出来た。州庁舎の一部にある博物館に行った。驚いたことにいきなり80名の幌馬車隊2組でこの地に来てインデアンと戦いこの地に住みついたことが説明されている。

ここは酪農で有名で北海道の酪農はここをモデルにしたと言われている。北大の教官や雪印の社員もこの大学に研修に来ていた。

また、近くの町には酪農博物館と酪農神社(Dairy Shrine)があり、酪農神社には昔使われていた日常的酪農での道具、博物館の方には足こぎの搾乳機や乳脂肪の測定装置などが陳列されていた。牛の人工授精器具などもあった。既に我が国ではよりスマートな器具機材が改良され使用されているのを見ると31年前のことだが我が国の模造力と工業力の力に感心したことがある。

一方、ワシントンでスミソニアン博物館に

行くと月面着陸したロケットや各国の戦闘機などが展示してあり、米国の科学力を見せつけてくれた。

また、米国ではギリシャ文明、ローマ文明の後の中世の文明は否定して米国に移住したので、過去の歴史はない。星条旗の前で米国憲法を遵守することを誓えば原則的には米国人になれます。この75年間は軍事技術を上させ、世界を押さえつけてきました。

コロラド州に牛肉生産地の実情を視察に行ったことがある。日本では肥育用子牛をセリで売買するのに、一頭ずつ選んで値段を決めている。コロラドでは集団の糞の状態でその群の値段を決めると言う。糞の性状を見るとその子牛群がどんな牧草地で飼育されたかわかり、当然子牛の成長具合がわかるという。飼料のトウモロコシは野積みで3×20×2(メートル)ぐらいで置いてある。年間総

雨量は500ミリと言うから可能なだろう。牧草の収量と年間雨量は高い相関があるらしい。一肥育会社で管理する牛の頭数は75万頭だった。

これに対して中国は4000年の歴史を持つといながら、異民族が興亡を繰り返したもので、現在の中国共産党政権は建国70年の国に過ぎない。その前の清朝は満州族によって作られたもので継続性はない。瀋陽の清国の発祥の地を見学しても瞠目するものがあった。逆に旧日本國統治時代のホテル、郵便局などが目についた。

一方、秦の始皇帝が残した兵馬俑坑の規模には驚嘆した。しかし、秦の始皇帝の子孫は秦氏を名乗って我が国の色々な地域に住んでいる。不老長寿の薬を求めて始皇帝の命令でわが国を訪れる徐福伝説は鹿児島から青森まであるが、一番有名なのは京都の平安京でし

よう。

また、能楽もその系統を引くもので能楽の大成者と言われる観阿弥や世阿弥親子の先祖は秦氏の系統だと言う。我々が常用する漢字を考案した種族は3世紀までに絶滅し、支那の代表的国である隋や唐に取って変わられている。彼らは牧畜系の鮮卑族が母体である。

その後はアジアとヨーロッパを繋いだと言われるモンゴル族の元、満州族を主体の清になっている。ここでは、和や清貧の思想が育つことはなく、「今だけ、銭だけ、自分だけ」の世界になるようだ。

最近のDNA解析による男性特有のY染色体分析の結果、その表現遺伝子型の種類が中国や韓国などではバラツキが少なく、我が国は多様性があると言う。両国では男性は殺されるか、日本に逃げて来たのかも知れない？

我が国は山に恵まれ、かつ四方を海に囲ま

れた温帯地帯に位置している。山の麓は田んぼや畑が作られる。中国の今度の病害、水害、蝗害の凄まじさを見てみると、このような自然環境の中を生き抜いた盗賊集団の頭目や宗教団体の司祭が天命と称して作った国だったとの感慨を新たにしている。

三、能は筆者の道標（みちしるべ）

能「花月」は花月少年が7歳の時、福岡県添田にある霊峰英彦山の麓で天狗に攫われ、九州、四国、本州の霊山を連れ回され、最後に京都の清水寺門前で楽器「鞆鼓」を打ち鳴らしながら寺の由来を語っている。そこに息子を探して父親が現れ親子の再会をする。二人は仏道の修行とともに旅たつと言う筋書きである。

筆者は警官だった父の転勤で、小学校入学までに5回転居、小学校を5回転校した。その間、空襲後の田舎への単独疎開も経験した。

中学、高校とも1回ずつ転校し、それぞれその間1回下宿を経験した。大学、大学院をへて鹿児島大学に就職して、やつと38年1箇所に着けた。

しかし、この間、35歳の時、東京築地にある国立がんセンター研究所に一年間下垂体や卵巣ホルモンの測定法を習得のため内地留学した。また、52歳の時米国ウイコンシン大学マジソン校に海外研修を5ヶ月と英独仏に1ヶ月の研修を行った。

これらは自分から強く希望したというよりも何か天狗のようなものに引き回されたような気分を持っている。

「取られて行きし山々を思いやるこそ悲しけれ——」

この山々のなかで筆者の在職中の38年と退職後の10年間に訪問した山は大変有意義なことを教えてくれました。

四、八重山の茅に始まり麓の茅門に至る。

○ 入来牧場候補地測量が初仕事

筆者が入来町浦之名を初めて訪問してから56年になる。同じ浦之名でも入来院家のある麓ではなく、八重山の斜面で標高517メートルの標識をもつ大学牧場建設予定地である。助手として、赴任3ヶ月目の昭和39年7月である。当時22軒の開拓農家が入植していた約100ヘクタールの牧場予定地の実面積をコンパス測量で測量するためである。

林学科で測量学を担当しているH助教授を測量者にO助教授と小生、それに学生3人で測量を行った。既に廃墟となっている開拓農家の住居跡に一週間寝泊まりして、事に当たった。ポールを二人で一本ずつ持ち片方がメモリの付いたロープを引っ張って進み、測定者はその距離と位置を確定する作業である。結果的に333本の標識を立てて紙面に架空

の平準化した平面図とその面積を表示した。予算が認められると、入来町役場の担当者と農業工学科で測量学実習を担当していたS助



鹿児島大学入来牧場全景

手と筆者の3人で境界線を接する地主の方と問題がないか確認作業を行った。

特に、測量では刈り払いと称して測量する場所の周辺を2メートル位の幅で草や枝を切り払ったところを移動するのである。しかし、それを外れると凄い茅の茂みで、身の丈より長く、7日間茅場を泳いでいるような感覚を味わった。この後は平成25年号(第9号)に詳しく報告している。

○茅門を訪ねて10年

まさか、最初の入来院から46年後に再び茅の歓迎に会うとは。茅門をくぐる縁繋ぎになった「入来院新能」に感謝する次第である。

貞子さんの町おこし計画は平成10年に澁谷氏下向750年の一連のイベントを成功させ、平成11年に入来院新能を開始されている。能舞台製作、演目選び、チケット販売、能興行の難しさ満載の中大変なことを成功させて



入来院夫妻と著者 平成22年(2010年)3月撮影

居られる。さらに、JR川内駅前にも能「鳥追舟」の親子像まで設置されている。

これは筆者の想像でしかないが、県民交流センター（能舞台）が平成15年に設置されているので、平成11年から始められた入来薪能は何らかの刺激になったのかも知れないと思っっている。

以上のような事で、入来町浦之名（八重と麓）は大変重要な修行の場になった。

五、おわりに

この十年間多くの場面で、「貞子さんに再会」して来ました。今年は小生の所属する宝生流皓月会発足50周年記念の年に当たります。さらに、鶴丸城御楼門復元が三月に完成したことも祝って祝賀能を思い立ちました。

演目は能「俊寛」。平安時代末期、時の宰相清盛の怒りを受け、薩摩の鬼界島（現在の三島村硫黄島）に流刑になり、ご赦免舟が来ても

本人だけは許されて居ないと言う悲劇です。

この演目は入来薪能で上演された能「鳥追舟」と二曲だけが鹿児島を舞台にして作られたものです。入来薪能の時チケトを振込用紙とともに郵送して貰った記憶があります。今度は自分がその役をする羽目になりました。祝い事なので、ご当地ものとは言え悲劇ばかりではと、前座に子供仕舞でお目出度い「猩々」を舞って貰おうと子供の募集、稽古場所の確保とこの新型コロナウイルス感染拡大防止の難題の中仲々大変です。しかし、貞子さんの苦勞に比べればたいしたことではないと変に納得しています。

その節、貞子さんと共に苦勞された重朝庵主と長女久子さんに祝賀能にご来駕頂けることになり嬉しい限りです。 完

（鹿児島県文化協会理事、鹿児島謡曲連合会会長、鹿児島大学名誉教授）

編集後記・・・

■早いもので、本誌の編集に関与するようになって十年になる。「貞子さん」再会「を旗印に故桐野三郎会長の指導のもと早くから本誌同人で、「ワシモ」の名前で薩摩川内市を中心に情報発信して居られる下土橋渡氏と相談しながらやって来た。その間貞子さんの三回忌、七回忌の記録を収録出来た。昨年は、重朝庵王の米寿のお祝いを記録出来た。大勢のお子さん、お孫さん、ひ孫さんに囲まれてのお祝いを拝見し嬉しい限りである。■一方、この十年の歲月は気がつくところから半数以上の方が鬼籍に入られたり、高齢化で投稿出来なくなったりしました。少しずつ新進気鋭の新人にも参加いただき、会食での話も含めて中身の濃い時間を過ごせ、「同慶の至りです。■残念なことに新会長の渋谷繁樹氏が病に伏せられました。当初からの同人で毎回洒落な発想と文で本誌に花を添えて来られました。早い復帰を祈念しております。(中西)

■「光陰矢の如し」といいますが、年を取ると特に時間の過ぎるのがはやく感じられてなりません。

これは、老化によって新陳代謝が弱まることに準じて時間の経過を感じる体内時計と呼ばれる生理的な時計がゆっくり進むようになり、その結果、外の動きが相対的に速く感じられるかららしいです。そういう訳なのでしょう、中西編集長の下で編集を担当させてもらうようになってからのあつこいつ間の十年間でした。■本号で新たに元入来郵便局長の米森寿美男さんと広島大学の水田丞先生にご執筆頂きました。また、表紙につきましては、昨年号に続き田原眞理子さんに素敵なイラストを描いて頂きました。ありがとうございました。(下土橋)

「炬ばたセイ談」 第16号

炬ばたセイ談会会長 渋谷繁樹

編集担当 中西喜彦・下土橋渡

事務局T895-1402

薩摩川内市入来町浦之名130

入来院重朝方

TEL・FAX 0996-44-3586

印刷 新大同印刷株 (0996-30-1811)



令和2年秋

第16号

〒895-1402

薩摩川内市入来町浦之名 130

炉ばたセイ談事務局